第III章
芦屋市まち・人・くらし活性化推進アンケート調査

１．調査の目的

本調査は、阪神・淡路大震災から 10 年が経過した本市のまちづくりや生活再建施策を中心とする諸事業を総括・検証し、市民のくらし、コミュニティ、まちとの関わり方などの市民生活の現状を把握することにより、今後の芦屋市の「まち・人・くらし」の活性化を目指した復興の総仕上げに生かすことを目的に実施した。

なお、被災の有無に関わらず、震災という出来事の前後における生活様式の変化を見るため転入者にも同様の質問を行っている。

２．調査結果（概要）

【回答者の属性】

１．性別

・ 女性の回答者が全体の６１．５%を占め、男性の３８．３%を大きく上回った。

２．年齢

・ 60 歳代の回答者が最も多く 22.9%、70 歳代が 19.2%、50 歳代が 19.1%でこれに続いている。

３．家族構成

・ 「親と子（2 世代家族）」が 49%、これに「夫婦のみ」の 30.5%が続き、あわせて 79.5%が核家族であることがわかる。年齢を加えて集約すると夫婦のみは 60 歳台から急速に増加し、70 歳台になると約 2 割が「自分のみ」の単身世帯になる。

４．居住地区

・ 年齢別に居住地区を見ると、呉川・竹園・伊勢・浜芦屋・松浜・大東・南宮・浜・西蔵町付近に 40 歳代が偏って住んでいる。

・ 高齢者の偏りを見ると、六麓荘・岩園町のエリアと、陽光町を含むエリアに 60 歳以上が多く住み、二極化傾向が認められ、住民異動の少ない地域と災害公営住宅の影響が考えられる。

５．居住年数

・ 回答者の半数弱（46.8%）が 10 年未満の居住年数であるが、その内の 36.2%は市内転居であり、市外からの転入も神戸市が 18.2%、その他の被災地が 6.4%となっている。

６．住宅形式

・ 「持ち家(一戸建て)」が 39.6%で最も多く、「持ち家(ﾏﾝｼｮﾝ等)」が 33．6%と続いている。

芦屋市では再転入者を補足出来ないため、被災したＡさんの軌跡は追えていない。他の研究機関や様々な資料からひも解くか、もしくは当時の住民票からの追跡調査が必要と考える。このアンケートをきっかけにして、そういった細かいデータが集積されて今後に生かすことが出来るように期待する。

懇話会からの一言

【震災からの復興について】

問７．被災の程度

・ 全半壊に一部損壊を加えると 75.7%となり、回答者の 4 人に 3 人は何らかの被害を受けている。

問８．震災時の住宅形式

・ 震災当時の戸建持ち家世帯の内、現在も戸建持ち家である割合は 79.2%であるが、問 16 の「震災後の気持ちの変化」において寄せられた回答と全体の傾向はほぼ一致してる。ただし、年齢を加えると再建資金の問題が加味されるのか傾向は変化する。

問９．震災復興事業

・ 全体の傾向としては 60・70 歳代の高齢層ほど事業に対する関心が高く、若い世代へとなだらかに低下している。（※震災当時は 50・60 歳台であることに留意）

問１０．復興事業の評価

・ 事業実施については、「必要であった」と「活力を感じている」が 1 位、2 位を占め一見すると評価が高く感じるが、その反面、「コミュニティが失われた」、「住民に配慮」が 3 位、5 位と批判的な意見も少なくない。
・ 実施地区に限定すれば、特に「コミュニティが失われたこと」に対する評価が厳しい。

問１１．復興状況（項目別第 1 位、※わからないを除く）

（1） 住宅の再建状況

・ 震災前より良くなっている（36.6%）

（2） 商店街のにぎわい

・ あまり戻っていない（23.6%）

（3） 駅前商業地の活気

・ 震災前と変らない（27.5%）

（4） 違法駐車やゴミ出しマナー

・ 震災前と変らない（37.0%）

（5） コミュニティのつながり

・ わからない（34.6%）

★★★類似調査との比較★★★（資料№3 - P25）

問１１－（１）住宅の再建状況では・・・。

(ア)神戸市の「震災前より良くなっている」（21.8%）を芦屋市(38.0%)が大きく上回っているが、一方、「震災による影響はなかった」が神戸市では 16.7%、芦屋市が 4.3%であることからのわかるように、市域に占める被災割合の違いがあり一概には判断できない。

（２）商店街のにぎわいでは・・・。

(イ)「震災前と変らない」が芦屋市 7.8%、神戸市 7.9%とほぼ同率だが、「震災前より良くなっている」では芦屋市の 24.4%が神戸市の 20.1%を上回った。

（３）駅前商業地の活気では・・・。

(ウ)この項目で特徴的なことは、「あまり戻ってきていない」が芦屋市では 12.0%に止まっているが、神戸市では 32.5%となっているところに住都と、商都の違いを垣間見ることが出来る。

（４）違法駐車やゴミ出しマナー

(エ)芦屋市では「震災前と変らない」に 38.8%が集中、神戸市では「マナーが戻っていない」に 32.5%がそれぞれ集中している。

【あなたのくらし向き】

問１２．くらしの変化

- 「同じようなもの」との回答が 41.9%と大勢を占め、これに「やや低下している」の 20.0%、「低下している」の 15.4%が続き、全体として低下傾向を示している。
- 年齢別では 60 歳代に低下意識がやや高い。

問１３．低下の要因

- 「震災と景気の両方」が 31.4%と最も多く、震災よりもむしろ「不況の影響」が 28%で続く、震災から 10 年を経た今日「震災の影響」そのものは 9.7%に止まっている。
- 年齢別では、40 歳代で「不況の影響」が 50.0%と高く、60 歳代では「病気や怪我、退職などの個人的要因」が 34.8%と最も高くなっていることが特徴的である。

問１４．満足度（各項目第 1 位、2 位）

（1） 毎日のくらし

- やや満足している（35.2%）
- 満足している（21.7%）

（2） 自分の健康

- やや満足している（30.9%）
- やや不満（21.1%）

（3） 人間関係

- やや満足している（30.9%）
- どちらでもない（29.1%）

（4） 家庭

- やや満足している（32.5%）
- 満足している（31.4%）

（5） 所得・収入

- 不満である（24.4%）
- やや不満である（20.7%）

（6） 将来のたくわえ

- 不満である（36.4%）
- やや不満である（21.3%）

※ 年代別集計・家族構成別集計、その他は資料 3‐P29 参照

問１５．就労状況

- 「主に仕事をしていた」男性が 61.4%、女性が 23.6%となっている。
- 年齢別の就労状況は 20 歳代の 64.4%から漸減傾向で 60 歳代の 29.0%までなだらかに低下しているが、30 歳代でいったん低下した就労状況が 40 歳代で増加しているのは女性の再就職と思われる。

※ 年代別集計、その他は資料№3‐P33 参照

★★★類似調査との比較★★★（資料№3‐P32）

問１４

(オ)（1）毎日のくらし～（4）家庭生活の 4 項目において「満足している」割合が神戸市を上回っているが、前述のとおり市の性格が異なる（住都と商都）ことに留意しなければならない。

【震災後の考え方や行動の変化】

問１６．住宅に対する考え方の変化（はい・いいえのみ抽出）

（１）　持ち家より借家が良いと思うようになった。
- はい（17.2%）
- いいえ（43.2%）

（２）　市営や県営住宅に住みたいと思うようになった。
- はい（14.2%）
- いいえ（62.2%）

（３）　住宅や土地の資産性に疑問を持つようになった。
- はい(39.7%)
- いいえ（19.4%）

（４）　戸建住宅が良いと思うようになった。
- はい(25.7%)
- いいえ(26.5%)

（５）　集合住宅が良いと思うようになった。
- はい（14.9%）
- いいえ(42.6%)

（６）　高齢者等の利用に配慮した住宅・設備への関心が高くなった。
- はい（65.9%）
- いいえ（7.3%）

（７）　住宅や住環境の安全性について注意するようになった。
- はい(83.5%)
- いいえ（1．9%）

（８）　多少高くとも耐震性の高い住宅に住みたくなった。
- はい（70.3%）
- いいえ(5．8%)

（９）　近所づきあいが大切だと思うようになった。
- はい（59.3%）
- いいえ（3.1%）

（１０）親と子は身近に住むのが良いと思うようになった。
- はい（51.7%）
- いいえ（10.8%）

（１１）都市にすむより、自然が豊かな農山村地域での生活がしたくなった。
- はい（16.3%）
- いいえ（47.8%）

※　その他、年齢別・家族構成別・現在の住戸形式別集計は資料 3 - P36 参照

問１７．人間関係に対する考え方の変化

- 「変化はない」が５８．５%と大勢を占めたが、「良好になった」（16.0%）と「一時良好になったがもとに戻った」（17.3%）があわせて 33.3%を占めていることから助け合いや支えあいの文化の萌しが合ったことは推定できる。

※　その他、年齢別・家族構成別集計は資料 3 - P47 参照

問１８．地域活動への関わり方の変化

- 「変化はない」が７割（69.6%）と大勢を占めたが、「関わりが強まった」（12.5%）、「一時強まったがもとに戻った」（11.5%）に回答が集まっていることに、前問同様の文化の萌しが感じられる。

※　その他、年齢別・家族構成別集計は資料№3 - P48 参照

次頁に続く

問１９．自らの行動の変化

- 「将来に対する備えを十分にすべきだと思うようになった」（55.0%）、「隣近所との結びつきを大切に思うようになった」（50.1%）が過半数に達している。
- 「地域のみんなが困っていることは、みんなで考えて解決する」（40.5%）との回答には新たなコミュニティ文化への息吹を感じる。
- 一方「ものに対する執着心を持たなくなった」（36.5%）がそれに続く。

問２０．まちづくりについて

〇まちづくりのテーマ

- 「公共施設の整備や住宅、住環境整備などのハード面重視」が 38.9%、「施設の使い方やまちの景観形成ルールづくりなどのソフト面重視」が 35.6%と拮抗している。

〇まちづくりの進め方

- 「地域の団体が主導して、行政と協働して進める」が 43.5%で、「行政主導で、住民の意見を聞きながら進める」の 39.1%を 4.4 ポイント上回った。これからの協働と参画の方向性を指し示している。

問２１．地域活動への参加状況（各項目第 1 位、第 2 位）

（１） まつり・スポーツ等の交流イベント
- 参加したいが時間がなくて参加していない（28.3%）
- 機会がないし、知らない（24.2%）

（２） ひとり暮らしのお年寄りのみ守りなどの福祉活動
- 機会がないし、知らない（45.6%）
- 参加したいが時間がなくて参加していない（31.8%）

（３） 防災訓練などの地域活動
- 機会がないし、知らない（44.1%）
- 参加したいが時間がなくて参加していない（26.5%）

（４） 青少年育成や子育てに関する支援活動
- 機会がないし、知らない（47.4%）
- 参加したいが時間がなくて参加していない（25.4%）

（５） リサイクルバザーやまちの美化運動など
- 機会がないし、知らない（37.6%）
- 参加したいが時間がなくて参加していない（31.6%）

なお、「参加する気がない」の割合が一番高かったのがまつり・スポーツ等の交流イベントでした（23.0%）

※ その他、年齢別・家族構成別集計は資料№3‐P59 参照

★★★類似調査との比較★★★（資料№3‐P61）

平成 15 年に実施された神戸市の集計結果と「積極的に参加している」の比較を行いました。

問２１－

（１） まつり・スポーツ等の交流イベントについては、芦屋市 15.7%、神戸市 12.6%でした。

（２） ひとり暮らしのお年寄りに対する見守りなどの福祉活動については、芦屋市 4.9%、神戸市 4.3%でした。

（３） 防災訓練への参加では、芦屋市 7.6%、神戸市 5.1%でした。

（４） 青少年育成や子育て支援については、芦屋市 6.3%、神戸市 5.3%でした。

（５） リサイクルバザーやまちの美化運動などへの参加では、芦屋市が 10.3%で、神戸市の 14.4%を下回っています。

【安全で安心なまちづくり】

問２２．防災・防犯面で不安なこと

- 「ふたたび大地震が発生しないかということ」に最も多い 67.1%の方が回答を寄せられ地震に対する恐怖は依然として拭いきれていない。
- 「付近の道路や公園が暗く、見とおしが悪く死角が多いため、放火や引ったくりの心配」が 42.9%で 2 位につけており、日常生活面での不安を浮き彫りにしている。
- 第 3 位には、「火事や急病の時に消防車や救急車が直ぐに着てくれるのかということ」が 36.6%で続く。消防救急体制や輸送経路(道路整備等)に対する不安が感じられる。
- 以下、「災害時等に備えた住民組織がないこと」（29.1%）、「近くに頼れる人がなく、人とのつながりが薄いこと」（26.9%）が続き、地域コミュニティの不存在が指摘されている。

※　年代別集計・家族構成別・地区別集計、その他は資料 3‐P65 参照

問２３．災害時に出来そうなこと

- 「避難所で救援物資の仕分けや配布を行う」が 52.1%で過半数を占め、「逃げ遅れた人を助けたり、初期消火活動を行う」（42.8%）、「地域の高齢者や病人などの世話をする」（31.5%）、「地域で炊き出しを行う」（30.6%）が続く。
- 年齢別の 20 歳代（21.8%）、40 歳代（25.1%）に「自分の専門知識を生かして活動する」が高いのが特徴的。

問２４．あなたにできる地域での取り組み（ベスト５）

① 「家庭の門灯を点灯するなど道路を明るくする」（45.2%）
② 「地域の危険個所を調べる」（35.9%）
③ 「防災・防犯に関する知識や情報を地域で共有する」（35.9%）
④ 「地域での活動を通して、住民同士のつながりを深める」（34.9%）
⑤ 「災害に備えて救助器具や水・食糧を備蓄する」（32.0%）

問２５．防災施設の周知

- 防災倉庫などの地域防災施設については、「場所も使い方の知らない」の 69.8%と「知っているが、鍵の所在など使い方はわからない」の 23.4%をあわせて 93.2%の人が直ぐに利用できない実態が明らかになった。
- 一方で「知っており、直ぐに使うことが出来る」（4.2%）の存在もあり、今後の取り組みが重要である。

問２６．芦屋市に求める施策（ベスト 10）

① 危機管理・防災対策の充実（48.0%）
② 高齢者のための施策（42.9%）
③ 環境問題への取り組み（37.1%）
④ 学校教育（35.2%）
⑤ 路上駐車など自動車への規制（33.1%）
⑥ 景観に配慮したまちづくり（25.3%）
⑦ 保育所など、次世代のための施策（20.8%）
⑧ まちの緑化や公園整備（17.9%）
⑨ 生涯学習の振興（16.9%）
⑩ 交通安全対策（16.8%）、⑩ 文化・芸術の振興（16.8%）

※　以上、より詳しい内容が資料№３に記載されていますのでご参照ください。

第Ⅳ章
震災復興 10 年・市民ワークショップ

１．市民ワークショップの目的

震災、そして復旧・復興の 10 年の道のりを振り返ることにより、今後の芦屋のまち・人・くらしが活力にあふれ、さらに発展していくことを目的として、公募市民や団体推薦市民、公募職員等が一同に会してワークショップ手法による意見交換を行なうなかから、市民の視点で震災や復興を捉え直すことにより、それぞれの思いを共有するとともに、復興過程のなかから得た市民防災や市民参画、協働のあり方等々を検証し、そこから得た教訓が今後 5 年、10 年の行政運営に資することが出来るように「市民ワークショップ」を開催した。

ワークショップは、行政が誘導することのないよう第三者をコーディネーター・ファシリテーターとして起用し、今後の市民と行政との役割分担や、取り組みの優先順位（プライオリティ）などについて活発な意見交換が行なえる環境づくりに努めることにより、今後の協働と参画の礎とするとともに、今後の施策（芦屋市総合計画等）に反映していく基礎資料として集積した。

２．市民ワークショップの進め方

① 山手中学校区・精道中学校区・潮見中学校区を各ブロックとする市内３ブロックにおいて第１回のワークショップ「あなたにとっての震災復興とは」をそれぞれ開催し、より活発な意見がでやすい環境を創出するとともに、地区ごとの被災体験の違いを検証しつつ、そこで得たそれぞれの体験や教訓、そして問題点を浮き彫りにする。

② 各中学校区ごとにショップを開催した後、10 年の振り返りから得た様々な教訓を今後の芦屋の「～まち・人・くらしの活性化に向けて・将来に生かしていくべきこと～」と題した全体会を開催した。

日時	会場	参加人数	内　　容
2004 年 8 月 21 日（土） 9：30～11：30	芦屋市分庁舎 大会議室	20 人	あなたにとっての震災復興とは （校区別）
2004 年 8 月 21 日（土） 14：00～16：00	芦屋市分庁舎 大会議室	26 人	
2004 年 8 月 28 日（土） 9：30～11：30	芦屋市分庁舎 中会議室	15 人	
2004 年 9 月 11 日 14：00～16：30	市民センター 401 号室	20 人	～まち・人・くらしの活性化に向けて、将来に生かしていくべきこと～ （全体会）

３．市民ワークショップのまとめ

（１）地区（校区）別ワークショップ

①　すべての中学校区で「くらし」・「コミュニティ」・「防災意識」に関する意見が一番多く出された。
②　震災直後の人のつながりやコミュニティの大切さを実感したが、現在は地域のつながりが薄くなっていると感じている人が多い。
③　同様に、震災で防災意識が高まったと言う意見と、現在は防災意識が低下している等両面の意見が出されている。
④　防災倉庫に対する関心（もっと活用しよう）が高まったという意見や防災訓練に対する意識や自主防災に関する活動が始まったと言う意見が各中学校区で出されている。
⑤　地域活動への関心や参加意識、また、役員の固定・高齢化など地域組織の抱える課題などに対する関心が高く、それらに対するそれぞれの地区で始まった新たな動きやアイデアがそれぞれの地区で出されている。
⑥　高齢者の増加に伴い、福祉や医療に関する意見は各中学校区で出されている。
⑦　各中学校区に共通して、商店街等の賑わいがなくなっているという意見が見られた。
⑧　住まいやまちなみの変化に関する意見は、区画整理や再開発が行なわれた精道中学校区に多く見られた。
⑨　古いお屋敷や屋敷林など芦屋らしいまちなみがなくなったと言う意見は各地区で見られた。
⑩　マンション問題は、まちなみの変化と新住民の増加といった地域コミュニケーションの両面があげられている。
⑪　まちの緑が減ったという意見の一方で、花を飾る家が増えたという意見も見られた。

※各中学校区で出された意見を、「くらし・コミュニティ・防災意識」、「健康・福祉・医療」、「住まいとまちなみ」、「にぎわい（商業）・文化」の各テーマごとに整理すると資料№４-P5 以降に詳しく記載している。

（２）全体ワークショップ

①　「くらし」・「コミュニティ」・「防災意識」において、地域の人のつながりをどう創っていくかが、各グループ共通の関心事であった。
②　そのなかでも、若い世代の地域活動への参加や世代間交流が共通した悩みとして多く出された。
③　そのキッカケとして、公園を人のつながりやコミュニティを創っていくきっかけにしてはどうかという意見が、共通して出された。
④　その他、子供を通してという視点から、学校や子ども会を核にして人のつながりを創ってはどうかという意見が多く出された。
⑤　防災活動を通じたコミュニティづくりとして、防災倉庫の活用が各グループから提案されている。
⑥　マンション、その中でも特にワンルームマンションの増加が地域におけるコミュニティ形成に影響を与えているという意見が多く出ている。
⑦　「まちなみ」においても、マンションの増加が挙げられており、そのなかで、マンション周辺の緑化に関する提案があった。
⑧　大きなお屋敷など芦屋らしいまちなみがマンションに変わってしまった中で、低層住宅と調和の取れた住環境づくりやまちなみに代わる文化を残せないかと言う提案が出された。
⑨　にぎわい創りの工夫として、個人商店が連携して宅配サービスの組織の結成や地域マネーなどの活用が挙げられている。
⑩　震災の経験を“伝える”、“発信する”ことが大切である。
⑪　その他、財政難を市民と一緒に乗り越えるために市民参画の市政の必要性も指摘されている。

※全体ワークショップで出された意見の詳細は資料№4-P21 以降に記載している。

10 年を振り返って、総括したり検証する意見を述べることは非常に大切であると同時に、意外と簡単である。難しいのは、その意見の数々を今後にどう活かしていくのかということ、まさしく行政との協働と参画の責任が生じる。

懇話会から一言

住民の意向をくみ上げる手法としてのワークショップは有効である。今後は意見を問題に、問題を課題に持ち上げる工夫を重ねて市政の改善につなげて欲しい。

懇話会から一言

参加する行政から、創りあげる行政へのワンステップになる可能性がショップにはある。そこで出た意見を大切に！！

懇話会から一言

※　以上、より詳しい内容が資料№4 に記載されていますので、ご参照ください。

第Ⅴ章　芦屋市まち・人・くらし活性化推進　～時流の中で～
市民・団体代表との懇談会　　目　次

聞き手：事務局（芦屋市企画課）

1　芦屋市日本赤十字奉仕団・（芦屋市婦人会会長）　・・・・・・・・・ 135
委員長 廣瀬忠子 様

2　芦屋市自治会連合会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139
会長 藤田 一　様

3　ボランティアグループ「とまと」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 143
代表 富田泰子 様 ・与原園子 様 ・川崎崇代 様
・河野和子 様

4　芦屋経済人会議・（芦屋東ライオンズクラブ）　・・・・・・・・・・・・ 148
代表幹事 石本章宏 様

5　芦屋川ロータリークラブ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 152
会長 山路正明 様 ・副会長 坂口友彦 様 ・永瀬純治 様
・若林益郎 様

6　株式会社　永瀬・（芦屋建設事業協同組合）　・・・・・・・・・・・・・・ 156
代表取締役 永瀬純治 様 ・相談役 永瀬禎二 様

7　関西電力株式会社 阪神営業所　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 161
地域共生係長 不老地政臣 様 ・保全主任 小笹晃一 様

8　芦屋市ＰＴＡ連絡協議会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 165
会長 中井和枝 様 ・副会長 山本美佐栄 様
副会長 成田直美 様 ・馬引幸代 様 ・村上美佐枝 様

9　国際ソロプチミスト芦屋　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 169
会長 江崎由佳 様 ・宮本陽子 様 ・森 房子 様

10　芦屋市商工会　・・ 173
会長 小田脩造 様 ・副会長 池本 要 様
・副会長 藤田芳子 様

11　大阪ガス株式会社 導管事業部兵庫導管部計画チーム　・・・・・・ 179
マネジャー 村上 敬 様 ・チーフ 辻 正治 様

12　芦屋市水道部　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 183
部長 林 一夫 ・次長 川崎正年 ・工務課長 濱崎幸一
計画担当課長 山岸 悟 ・施設担当主査 山下徳正

芦屋市日本赤十字奉仕団委員長・芦屋市婦人会会長
廣 瀬 忠 子　様
日時　平成１６年１２月１日（水）午前９：３０～１１：２０
場所　芦屋市春日町（ご自宅）

（企画）おはようございます。お忙しいところ、ご自宅までお邪魔いたしまして恐縮です。本日は現在、芦屋市が取り組んでおります「震災復興１０年事業」の一環として震災当時の廣瀬さんはじめ日赤奉仕団や婦人会でのご活躍について、改めて取材させていただくとともに、その後の課題や現状、昨今の時事問題に対するお考えなど幅広くご自由にお話を伺えたらとの思いで寄せていただきました。

（廣瀬）おはようございます。
では、この度新聞でも取り上げていただいたところなども含めてお話をさせていただきます。

（企画）では、早速ですが廣瀬さんに代表される芦屋市日本赤十字奉仕団や芦屋市婦人会の生い立ちなどもせっかくですのでお教えいただけますか。

（廣瀬）はい、婦人会は昭和２１年の１２月に発足しておりますから、終戦の翌年ということになりまして、奉仕団も婦人会と同じメンバーで表裏一体になって頑張ってきましたので、昭和２４年頃だったと思います。
　奉仕団は、毎年行われている防災訓練での炊き出しなどをさせていただいておりますし、震災の時に実際に活用してもらった「包装食」は、災害時における日赤の支援を代表しています。

※ ちなみに、この「包装食」（写真）は廣瀬さんが考案されて日本赤十字が実用化したものですが、昭和４０年の実用化以降、幸いなことに大きな災害もなく過ごしてきたものが、廣瀬さんの足下の阪神・淡路大震災で大活躍とは、これはもう何かしら運命的なものを感じざるを得ません。震災２日目、これを配食させていただいた時の皆さんの顔や、あれ以来、国外の災害でも活用されているお話を聞くと、私たちまでが何かしら誇らしい気分になる。

※ 使い方は既にご存知の方も多いかと思いますが、加えて７２時間という保存性の高さと、具は何でも入れて炊き込みなどにも応用できるという話は廣瀬さんならではの懐の深さを感じられて楽しい。

（廣瀬）あの時は、次の日に市役所に駆けつけて広報車で市内を回りました。避難所の案内や、その時々の最新情報を市民の方にお知らせするのですが、「役所の文章は硬くてわかりにくい」。
　全部書き直してわかりやすく伝えることと、第一声は元気な声で「おはようございます」。この二つを徹底しました。

（企画）必要な情報と元気を届ける。あの頃の被災者にとっては一番大切なことだったかも知れませんね。

（廣瀬）広報部隊では、柏市（千葉県）から応援に来てくださった皆さんが良く出来た方ばかりで本当に助かりました。

まちに出て、広報してますと私の声だとわかる人がいてくれるんです。「あー、会長さん」。それでお互いの無事が確認できて、さらに元気に頑張れる。

そんな思いもあり、一生懸命にやりました。

（企画）毎日となると、大変な作業だと思われますが。

（廣瀬）そうそう、ああいう時ですから「しんどい」という感じはなかったのですが、３週間たった頃に実は肺炎になってしまいました。広報ですから、マイクを使いますために「マスク」が出来なくて。

倒壊家屋のアスベストが原因だったようです。

（企画）それは、大変なことでした。お体のほうはその後どのように。

（廣瀬）まぁ、入院もいたしましたが程なく元気になりました。その後に、仮設住宅が公園にできるというお話を聞きまして、良かったと思う反面、桜の木がたくさん切られている話に胸が痛みまして、切り落とされた蕾のついた枝を集めてバケツに入れておいたんです。そうしたら、ものの３０分もしないうちに全部なくなってるのよ。癒し効果というのですか。日本人は桜の花が大好きなんですね。

（企画）皆さんが被災されても「やさしい気持ち」を失っておられなかった、お互いの心が通じ合ったような「良い」お話ですね。

（廣瀬）そうそう、あの年の干支は確か「イノシシ」でしたでしょ。そこで婦人会が新年会に毎年配る干支の湯呑を１００個全部、避難所に届けさせていただきました。あの年の新年会は出来ませんでしたから。

（企画）幅広く、常に前を見て動いておられるのが良くわかります。当時の出来事で特に印象深く残っている事柄などはどうでしょう。

（廣瀬）自分の身近なことで良ろしければ、精道中学校の体育館は被災者の方が避難されて一杯のため、テントで行われた卒業式には感動しました。卒業生一人ひとりの生徒の名前が呼ばれる。生徒が立ち上がって返事をする。

次が呼ばれる。生徒が返事をする。とうとう、亡くなられた生徒さんの名前が呼ばれる。どうするんだろう・・・と、思う間もなく。

クラス全員で声を揃えて「ハイ」と天にも届けとばかりに返事をする。大きな声。感動しました。

テント下での整列といい、式の構成といい、本当に心のこもった手作りの卒業式のすばらしさが深く印象に残っています。

※ Ｉ・Ｔ・Ｃ（International Training in Communication）という全国組織があります。こちら主宰の全国スピーチコンテストで実は廣瀬さんは優勝されておられます。載せないでというお話でしたが、乗せちゃいます。この時のスピーチの話題が「ふたつの卒業式」ということで、ご自身が終戦の年の３月に経験された芦屋女子高等学校の卒業式と、震災の年に行われた精道中学校でのお孫さんの卒業式を話材として「失ったものの大きさと得たもの」を重ねて話されたようです。今さらながら、時の流れ（歴史）の重みとそこから学ぶことの尊さを教えられるようなご講演を、是が非でも私たちにもう一度と思うのは私だけでしょうか。

（企画）ところで、震災経験は今の生活に何らか変化を与えましたか。たび重なる台風被害や新潟県中越地震と言う出来事を含めて、いかがでしょうか。

経験 各地に伝える
聞き書き 被災地へ
阪神大震災 ◆40◆
芦屋市日赤奉仕団委員長 広瀬 忠子さん77
はんこ、通帳より 靴や眼鏡が大事
読売 16.9.21

（廣瀬）たとえば、断水した時のためにお風呂の水はあくる日まで残しておく。ベッドの横に靴を置いておく。新聞にも申し上げたように、通帳などは後で手続きも出来ますが、入れ歯とか眼鏡は直ちに困りますから日常生活にないと困るようなものは必ず身近なところに置いておく。

こういったことは、するようになりました。最近になって、全体的に危機感、これは災害への備えに限ったことではありませんが、薄くなってきているように思います。

（企画）中越地震への対応もきわめて早かったようにお聞きをしておりますが。

（廣瀬）はい。阪神･淡路の時の避難所において間仕切りの必要性を痛感しておりましたので、直ぐにダンボール屋さんにあたって値段を決めました。それで、新潟県支部に連絡をとりましたところ、新潟では家族を区画する仕切りはいらない、むしろお隣さんの顔が見えないと心配、とのご返事がありまして・・。

地域差というか、難しい面があるのだなぁと、あらためて勉強させていただきました。

（企画）そうですか。地域性や文化の違いなど、経験が経験のままでは通用しないというのも新たな教訓ということですね。ただ、本市の職員がボランティアで小千谷総合体育館を訪れた時には、仕切りのあるご家族とないご家族が半々ぐらいだったということですので、必要性という意味での廣瀬さんの目の付け所はやはり正しかったということになると思います。

（廣瀬）「していただく幸せよりも、させていただく幸せ」を考えながら行動したいですね。

（企画）少し、失礼なご質問ですが、検証という意味で「芦屋市奉仕団」、「婦人会」ともに震災の後遺症というか、負の影響が残っているというようなお話はございませんか。

（廣瀬）団体といいますよりも、構成員である会員個々が被災しましたので、その環境の変化といいますか、その影響はあると思います。結果的には良好になるのでしょうが、時としてギクシャクする場合もあったかも知れませんが、団体としては次から次に、新しい取り組みに向かって進んでいくという状況がありますので、そういったところを打ち消してくれているのかも知れません。

（企画）ありがとうございました。では、次に廣瀬さん、あるいは団体が今、特に力を入れておられる取り組みをお話ください。

（廣瀬）芦屋発の文化を創りたいなって思ってます。それも若い方々とご一緒に。難しいことではないんですよ。お箸の持ち方や、食事の仕方といったくらしのマナーのこととか、集合住宅では夜遅くには可能な範囲でトイレの水は流さないとか、夜中に洗濯機を使わない等、また、キッチリしたご挨拶が出来るなどの生活のルールを守ることを通じて、周りへの気配りが出来ることをもう一度カッチリと見直して、しっかりと根付かしていきたい。そんなことを芦屋発で若

い人と一緒にやりたいと思っています。

後は、チョッと少なくなっている手紙や葉書の活字文化の復興といいますか、人とのコミュニケーション手段であると同時に、残すことが出来る、見せることが出来るという奥深さをもう一度取り戻したいというか、見直したいですね。

ただし、残る、見せるという行為には責任がついて回りますが、それらも含めて良いんじゃないかなと思います。

（企画）高齢化社会、次世代育成にかかる社会的要請などに、一人ひとりが関わっていくためにも本当に大切なことだと思います。古くて新しい日本文化の再発信を芦屋の地から、と言ったところですね。

では、相当なお時間を既にいただいておりますので、最後に、これからの市役所というか行政に期待することを一言、お願いできますか。

（廣瀬）お困りです課は、いいですね。私も市役所のどこに行ったらいいのかが良くわからない時には「お困りです課」のお世話になります。それと、これは市役所で良いのかなと思う時にも、とりあえずは「お困りです課」という選択が出来るようになりましたから。

あとは、自分たちのやっている仕事にもうチョッと「こだわり」を持っていただきたいかな。以前、街灯を増やしてまちを明るくすれば「シンナー等」の犯罪は減るという考え方で取り組んでいただいた時に、街灯をつけると近所の方から明るくなり過ぎて眠れないという苦情を受けて「引き下がった」という話を聞いた。何故？

私的な眠りの問題と、公的な犯罪予防の問題なので「引き下がってはダメ」。

カーテンをつけるとかの工夫をお願いしてでも、理解してもらえるまで頑張らないといけないと思う。これが、一つ目のこだわり。

二つ目が、「市民憲章」へのこだわり。せっかくの市民憲章が行政や暮らしに生かされていない気がしますので、もっとこだわりを持って欲しい。

次に、芦屋市としての目玉を創って欲しい。市長さんの「庭園都市宣言」は良い。それを職員さんが活かしていかないとダメ。たとえば、北館前の花壇をベルサイユ宮殿のようにその花壇を見るためだけに人が訪れるという風にしなくちゃ。これもこだわりかな。

あるいは、総合公園から望む六甲山の山並み、あの稜線の美しさに勝るものはないと思う。神戸のように近すぎず、だからと言って遠すぎずで秀逸の借景だと思う。これを生かしたプロムナードなどを整備すると「庭園都市」に近づくとともに美術館なども生きてくるように思います。

そんな夢のあるお仕事をするにしては、市役所に元気がない。小さくまとまるのも良いけど、前を向いて頑張って欲しい。そのためには、やり始める「勇気」を出す。やり始めたら、やり抜く「努力」が要る。そのための情報収集には日光の「見ザル･聞かザル･言わザル」のサルではなく、めでたいの鯛でいって欲しい。「見タイ・聞きタイ・言いタイ」で頑張ってください。

（企画）ありがとうございました。

芦屋市自治会連合会会長
藤田　一　様
日時　平成１６年１２月７日（火）午前１０：００～１２：１５
場所　芦屋市東山町（ご自宅）

（企画）おはようございます。お忙しいところ、ご自宅までお邪魔いたしまして恐縮です。本日は現在、芦屋市が取り組んでおります「震災復興１０年事業」の一環として震災当時の藤田さんはじめ芦屋市自治会連合会としてのご活躍や、苦労話などをお話いただき、今後に備えるための貴重な教訓を残していきたいと考えています。他にも、これからの若い世代に対するお考えなどを含めて幅広くご自由にお話をいただけましたら、それも幸いかと考えておりますのでよろしくお願い致します。

では、まずは震災直後は、どのような状況でしたでしょうか。

（藤田）震災があった当時、その時、私は寝ていました。その日（１７日）に近畿郵政局に届ける資料があって、午前２時前まで「桐」のデータ整理をしていたので、相当揺ったにも関わらず目が覚めなかった。気が付いたときには、目の前は割れたガラスが散乱し、パソコンを操作するために少しだけ寝間をずらしてなければ私は今日ここにはいなかったと思う。

その後も、自治連として、あるいは自治会としてというよりも専門知識と経験を生かす形で震災直後の状況に関わっていたというのが実態です。

（企画）応急危険度判定の関係ということでよろしいですか。

（藤田）東山町あたりは、幸いなことに被害も少なかったし、女房が民生委員であったこともあって、そっちの方は任せっきりで、自宅のことは放ったらかしになりました。

と言いますのも、昭和２３年の福井大地震の時に暁天先生とご一緒に現地調査を行っている経験などがあるもので、以前から神戸・阪神間に地震がきた場合を想定した一種警鐘のようなものを口にしてきた経過もあった。

当時、地震の次の日に福井に向かったが２つ手前の駅で電車は降ろされた。

そこからは、兵庫県のジープに同乗して現地入りし、福井大学（当時の福井工専）の研究チーム等と一緒に被災地を踏査した。例えば、大和屋さんが傾いた映像は当時も良く流されたが、その傾斜角の測定や、福井に多い製糸工場の被害状況に特定の現象（壁際に逃れた人はほとんど圧死されていた。）が検証されたこと、また、墓石の飛ばされた方向と距離から、地震発生の方位性と大きさを測定したりした。芦原では湯を抜くための竹筒の深度とその地殻層の状態から地盤の状態を調べたりも出来た。

丸岡では、ケヤキ造りの立派な建物が多く４５㌢角の柱が入ってたり、立派なヌキが通ってたりした。この手の建物では、建物が拉ぐこともなく沓石からポンと横に降りた形で存在しているケースが多く。沓石が一種の免震効果を果

たしたことが想定できた。

（企画）それほどの経験をお持ちで、以前から警鐘を鳴らしてこられたと言うことであれば、あの日の地震にも違った思いや、別の角度から受け止められた面もあるのでしょうか。

（藤田）それ見たことか、という気持ちも正直あった。当時のニュース等で国や県の幹部や担当者が「予期せぬこと」とか「想定外」という言い方をしていたことに、正直言うと腹も立った。この発言そのものが間違いで、十分に想定できていた筈で、備えが足らなかったということだ。

（企画）多くの立場をお持ちのなかでも、応急危険度判定の関係では、相当お忙しかったのでは。

（藤田）当時芦屋市が特定行政庁ではなかったこともあって、県などから判定の基準に関する相談は多くあった。ただ、いくつかの方法があるものの、被災地全体で共通の考え方を当てはめる必要がある筈だから、何某かの統一基準があるんであれば、それを使うべきだと言う事を伝えた。

実務のほう（判定）は、県の依頼でやってました。ただ、ラジオやテレビで応急危険度判定の相談・連絡が流され始め、その電話番号がうちの事務所になってたので、直ぐに回線がパンクしました。

（企画）精道幼稚園で受付を行う前ですね。

（藤田）そうこうするうちに、ようやく精道幼稚園が受付場所として提供された。行政側の応援部隊では明石、加古川、高砂などは良く頑張っていた。芦屋市に対する細々とした批判もあったがあの状況下では致し方ないかとも思う。

ただ、そういう公的な受付が始まっているにもかかわらず相変わらずボランティアが募集されて、勝手なことをされたのには参った。判定レベルはまだしも、個人情報というか当該人の倫理観やモラルが求められる取り組みであると考えていましたし、芦屋の家屋敷は資産性が高いこともあって人と人とのコミュニケーションが何よりも大切であった。その点は、当時ボランティアを担当していた部長にも再三再四申し入れたのだが、何も改善されなかった。

（企画）申し訳ございません。貴重なご意見として記録いたします。

（藤田）ちょうど、その頃に静岡の建築士協会から神戸に派遣されていた部隊が帰県するという話が耳に入ったので、交渉して芦屋で途中下車、危険度判定を手伝ってもらった。言うまでもないことだが、京都の協会からきてくれた方々を含めて食事は手弁当、寝る場所は自分で確保という当たり前の心構えが出来ていることが被災地への応援部隊では前提となるが、こういった心配りにも感謝したい。

（企画）本当に、ボランティアはじめ多くの支援部隊には助けられました。

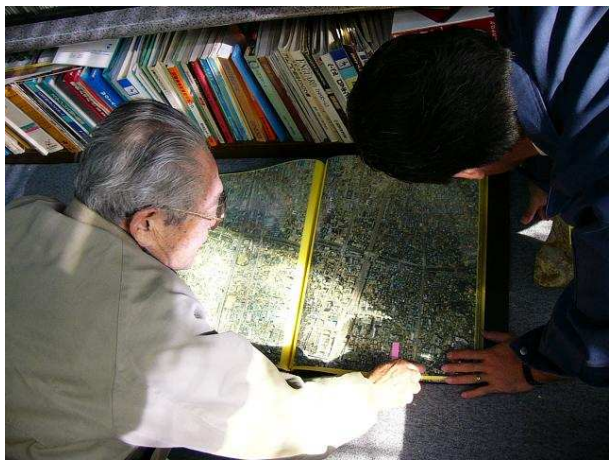
（藤田）私は、ボランティアという言い方というか、その感覚にはチョッと違う感覚を持っているのですが、ああいうときは助け合うのが当たり前であって、わざわざ、私がボランティアでござる的な発想はどうなのかなと思うところがあります。

（企画）確かに、当然のようにその専門性を生かしていただいて自宅も（奥さんも）放ったらかしで頑張っていただいた藤田さんのお話を伺っているとそういう面

もあるかも知れませんね。そうなってくると本当に日常的な関わりというか取り組みが大切ということになりますが、自治連、あるいは自治会としてそこらあたりはどうでしょうか。

（藤田）自治会という組織は、強みがあります。今、お話したようにたまたま東山町は被災の程度がそれほどでもなかったという側面はあるものの、やはり何もないということはない訳です。避難された方もおられたし、傾いたお宅に居続けられた方もおられた訳です。なのに、会長の私はというと、専門性を生かすほうの役割で飛び回っている。そうなった時に、副会長たちの存在が大きいのです。自治会全体のことは副会長等がやってくれる。私は、やはり専門性の中からお宅に居続けられる会員の建物を監視するということで、自治会としての見守りも実施できる。そういう動きが取れるのは、強みだなと思いました。

（企画）なるほど、機能的ですね。でも、日常的な信頼関係と会員との相互理解がなければ成り立ちませんね。



（藤田）そう。お互いに顔を知っているということと、「まち」を知っているということがああいう状況下では特に大切だということが良くわかった。

土地勘がある者と、ない者では現地に行き着く時間も違うし、決して行き間違いを犯さないという意味からも活動しやすい。

当時は、住民の多くが失意のどん底にあったわけだから、そういう間違いが有る無い、いかに早く約束どおりに現場に赴くということ一つで人の感情や表情が変わったこともある。

結局、如何にまちに親しんでいるかは日常のあり方によるものだと思う。

私に関して言えば、昭和２０年の阪神大空襲時の芦屋も知っている、という強みもあった。

（企画）なるほど、芦屋が好きで好きでたまらない。だから、芦屋のまちを隅々まで知っている。そういう人を大切にしておかなければならないと言うことにもなりますね。

ところで、そういう様々なことを震災で感じられた藤田さんが、今、自治連や自治会で主体的に取り組んでおられることのなかに、防災・防犯面での取り組みはございますか。

（藤田）自主防災組織の関係は進んでいると思います。防犯面では過去からやってきた経過があるので、それを大切にしながらやっていきたい。特に東山町は市内で唯一の山岳公園というか、ブラインドの多い公園がありますので非行の発生を未然に防ぐ取り組みを継続してやってます。以前、防犯協会の婦人部長に熱心な方がおられてその流れがいい意味で引き継がれています。他の自治会でも新しい取り組みがありますし、頼もしいと思っています。

（企画）やはり、経過というか過去から引き継がれてきた良き伝統のようなものは大切にされるべきですね。その観点から、最後になりますが「後進」というか「後輩」に対する思いのようなものがございましたら一言いただけますか。

（藤田）青年団というものをご存知ですか。今は、市内にも様々な団体があって、そちらでの活動などもおありなので、以前のように、それぞれの地域に根ざした青年団活動が出来ていないような気がする。自治会の立場で言うと、様々な活動の原点には地域活動があるように思いますし、その地域の中では家族という最小コミュニティがあるわけですから、そのコミュニティを支える地域というものをもう一度見直していただいて、足下を見た活動に力を注いで欲しい気がします。

（企画）ありがとうございました。われわれ若年世代には耳に痛いながらも大変勉強になるお話が伺えました。また、別の機会にもいろいろなお話がお伺いできますことを期待いたしまして、本日は終わりとさせていただきます。

ボランティアグループ　「とまと」
代表 富田 泰子 様・与原 園子 様・川崎 崇代 様・河野 和子 様
日時　平成１６年１２月９日（木）午後１：００～２：１０
場所　芦屋市役所　北館２階第２会議室

（企画）おはようございます。お忙しいところ、お呼び立てをいたしまして恐縮です。
本日は現在、芦屋市が取り組んでおります「震災復興１０年事業」の一環として震災当時の富田さんはじめ「とまと」の前身としてのご活躍や、苦労話など、その後の「とまと」さんとしての抱負を交えた活動などのお話を貴重な教訓として残していきたいと考えています。阪神･芦屋大震災の年は「ボランティア元年」と言い換える向きもあるほどに、その活躍が見直された年でもありました。震災当時にこだわらずご自由にお話をいただけましたら幸いかと考えておりますのでよろしくお願い致します。
では、まずは震災直後は、どのような状況でしたでしょうか。

（とまと）当時は、「とまと」は存在しておりませんでしたが、個人として出来ることから始めました。芦屋市のボランティア委員会で炊き出しのお手伝いをさせていただいたのが最初でした。その後、ライフラインの復旧により炊き出しも徐々に縮小してまいりましたので、その後は仮設住宅での安否確認（見回り）などを行いました。が、そういう経験は初めてでもあり不安や責任を感じましたのでカウンセリングの学校に通いながら、ということになりました。

（企画）学校に通いながら･･･。

（とまと）はい、心のケアといいますか、そういうことは誰にでも出来ることではないと思いましたので。

（企画）ありがとうございました。

（とまと）その後、９月頃でしたかボランティア委員会が解散するということで使用させていただいてた部屋も出ていってくれと･･。あまりにも突然で、面食らう部分もあり、いろいろと別の方法も相談させていただいたのですが、どうにもなりませんでした。

（企画）そうですね。当時９月頃というと行政の本来機能の回復というか復旧の始まった頃と記憶しておりますが、体制を変えるのに対案がないというのも行政の悪い癖というか旧弊に属する部分として猛省する必要があります。その後はどうかということを考えても、あまり成長はしていないかも知れません。大きな課題です。

（とまと）そうですね。取り組みが継続していましたから、被災者はじめ住民の皆さんからのニーズはあった訳ですよね。それが、場所の問題から破綻するというのはなんとも理解し難いものがありました。松浜公園のプレハブでも良かったので、そういうことも申し上げましたが、ダメでした。理由は「整理したい」の一点張りであまり覚えてもいません。

だからといって、立ち止まるわけにはいきませんので「芦屋どんぐり」というグループを立ち上げることにしました。与原さんはじめ当時一緒にやってきた皆さんと一緒になって１０人程度でやろう、ってことになりました。

（企画）「芦屋どんぶり」ではなく、「芦屋どんぐり」ですね。

（とまと）そう、「芦屋どんぐり」なんです。ところが、既に有料ボランティアグループで「どんぐり」さんがありましたので、これは紛らわしいかなと。

（企画）それで、「とまと」さん。

（とまと）はい。

（企画）「とまと」さんのネーミングには何らかの思い入れというか、こだわりというものがあれば是非教えていただきたいと思います。

（とまと）一番は、とまとの赤い色がみんなの「元気」に繋がらないかという思いが強かったです。後は、音の響きがかわいいとか、覚えていただき易いとか、という理由です。

（企画）なるほど。ところで、精力的に活動を継続されている「とまと」さんなんですが、自らの被災状況などはどうだったのですか。

（とまと）わたしの自宅は当時は立て直して１．５年ぐらいだったので見た目の被害はない。もちろんなかは大変でしたけど、自分のことは自分でしてから活動を始めました。

（とまと）わたしは、社宅でした。わたしも見た目の被害はたいしたことはなかったと思いますが、わたしだけではなく、避難所には行かずに自宅で頑張った人の中にも外目にはわからない部分で大変なことは多かったと思います。避難所であろうが自宅であろうがライフラインの復旧までは程遠く、お店も壊滅してる中で当然のように、物資は届けられませんでした。今もそうですが、小さなところで肩を寄せ合って頑張っている人にはなかなか光が届かないという難しさを感じます。

（とまと）わたしたちはシーサイドの高層住宅なんですが、やはり同じように見た目と実際との違いに戸惑いました。

立て直されて、１．５年が「とまと」代表の富田さん、社宅は当時から富田さんと志を同じくされて最初から参加され富田さんを支えてこられた与原さん。シーサイドの高層住宅にお住みであったのが、３年目からとまとの活動に参加された川崎さんと河野さんのお二人です。

（企画）否定いたしません。これからは特にそういう「小さなところ」こそが大きな課題になっていくと思います。次に、新生「とまと」さんとしての最初の活動は何かというところに興味が移るのですが。

（とまと）ランチサービスと仮設住宅への訪問がメインでした。仮設住宅ではお話ボランティアといいますか、ケア付き住宅にお住まいのご高齢の方、失意の方とのコミュニケーションを図ることで少しでも気を晴らしていただき明日への活力を養っていただけたらとの思いで続けました。後は、高嶋君という写真家の学生の協力により震災当時の写真が残せたり、市の被災地の記録を残したいとの要請に応えるかたちで市内在住の友人である小林氏に定点観測を行ってもらったりしました。

（企画）ありがとうございます。それにしてもすごい活動量ですが、「とまと」さんにとってのモットーというか、何かこれだけは守りたいというものがあるのですか。

（とまと）第一に、無理をしない。好きでやり始めたことも無理をしますと長続きしません。絶対に無理をしない、ということが第一です。第二には、家庭第一でやっていく。それぞれ構成員には主婦が多かったり、様々な事情があるわけですから、まずはお互いに家庭を大切にしてやっていこう、と、そういうことを確認しあっています。

三つ目には、楽しむということです。やはり、楽しくなければ続いていきませんし、相手の方にも失礼かと思いますので、ここは「楽しく」やっていくことを大事にしたいと思っています。

（企画）素晴らしいことですね。継続は力といいますがいかに素晴らしい取り組みであっても継続しなければ意味をなさないものもたくさんあります。「とまと」さんのお話を聞いておりますと、お近くにいる（参加する）事でより豊かな人生にめぐり合えそうな、そんな気になってきます。一度、われわれ職員に対してそういったお話で研修会などをお願いできませんか。

（とまと）イエイエ。（と、富田代表の微笑返しで軽くいなされましたが、これからの自治体職員にはボランタリィ精神についての学びも必要です。これからも、実現に向けて粘り強く交渉を重ねていきます㊟。）

（企画）川崎さん、河野さんのお二人はこういった「とまと」さんの雰囲気に誘われて、ご参加されるようになった、ということですか。

（とまと）イエイエ、実は友達に誘われまして、勧誘ですね。でも、実際に誘われて寄せていただいた取り組みがとても楽しそうで魅力的でしたから。きっかけは勧誘かもしれませんが、参加するしないは自分で決めました。それに、わたしたちは３年目と５年目からの参加になりますので、今日は震災当時のお話しをこうしてお伺いして、とても大変だったんだなということと、「とまと」の素晴らしさがあらためて良くわかりました。

（企画）そうですね。今一緒に活動されている方々はイベントなどに参加されて、とまとの活動に共鳴されてご参加されている、ということですね。

次に、現在の取り組みの目玉というか特に力をいれておられることなどがございましたら、ご紹介を願います。

（とまと）特にといいますよりも、継続してやってきてるメニューの①としまして、２回／月のペースで喜楽苑に伺ってお話しと手芸のボランティアをやってます。

お話と手芸はセットでして、その訳は、どうしてもお話だけになると集中してしまって、話さなくてもいいこと、例えばご家庭のこととかに話題が行っちゃいますので、手芸をしながら、その共通の話題も入れながらというほうが癒しの効果としては高いのではと考えました。メニューの②は、書道教室です。こちらは１回／月のペースで聖徳園にお伺いしています。後は長いほうのレンジで３、５、７年の節目の年に写真展を開催しています。

（企画）素晴らしいですね。やはり、継続は力といいますが、ここまで着実に歩を進めてこられた道のりには山があったり谷があったり様々な困難があったのではございませんか。あるいは、こんなことがやりたいということでも結構ですし、さらには行政に対してこんなことは出来ないのかという事も含めまして、お話をいただけますか。

（とまと）苦労といったようなものはありません。申し上げたように楽しくやってきました。ただ、一つだけ、代表というのは「いやだ」とズッと申し上げていた時期がありました。でも、結局は皆さんに支えられてここまでやってきましたけども。あと、やりたいことというか、疑問として持っておりますのが喜楽苑に行っているだけで良いのか？と。

　現実的には喜楽苑におられる方はまだしも、在宅で話し相手もいない、そういったご高齢の方へのケアの方がもっと大切になってきているのではないか、ということが気になっています。だけど、そこまで考え始めますと仕掛けは大事になっていきますし、１６名という今の「とまと」の陣容では如何ともし難いことですし、というところです。

（企画）行政としても、責任を感じるところです。官と民というゾーニングに隙間が出来初めて、その隙間に関しては、あらたにＮＰＯというかボランティア団体等のご支援を得ているところが大いにある。官にも民にも出来ない第３ゾーンというのですか。行政は、これ幸いとそこに頼るだけではなく、そのゾーンがより健全に発展していけるような環境整備を行う責任があるように思います。

（とまと）わたしは、９０年に芦屋にきて震災に遭い、その後は弓場町に引っ越したりしながら、今日は舞子からよせて頂きました。そうですね、最初はメンバーが集まる場所もなくて富田さんのご自宅に集まったり、市役所の食堂を使ったりというのが常態になっていました。それから考えると、今は市民センターの談話室が使えるようにしていただけておりますので助かっています。

　当時も、松浜公園のテントをそのまま残してもらえないかとか、仮設住宅をふれあいセンターとして活用できないかとか、いろいろな可能性を試してきましたが、あまり聞く耳を持ってもらえなかった。少しずつ良くなっていくのかもしれませんね。それと、当時の報道は偏っていて神戸と西宮には救援物資が届くが芦屋には来ない。余った物がようやく芦屋に回ってくるような状況で、自宅で頑張っている人までは到底回らないという時期があった。これを幸いというのか、その分だけ、自発的な活動が出来る「人」の受け入れに関しては芦屋市が一番だった。物資も足りない、人手も足りないということが幸いしたように思います。

（とまと）あと、個人情報の保護と活用についてのメリハリがないというか、行政はもう少し前向きに取り組んでいただきたいこともあります。今日の話にも共通して出てきていますが、表立ったところでしかニーズが把握できない。

（企画）今、情報処理が過渡期に差し掛かっています。必ず有効な手段を見出して実現しなければなりません。それも近い将来に実現することが必要だと思います。

（とまと）他、何でも話して良いですか。

（企画）はい、結構です。

（とまと）バスの助成金の補助などは、高齢者の活動性を後退させていると思います。財政的にはさぞ大変なのでしょうが、「とまと」が在宅高齢者へのケアを考える前に、引きこもらない環境、社会的に活動できる環境を作ることを行政は考えていただきたいように思います。それと、交番に警察官がいないということについてどうお考えなのか。ボランティアや自治会が防犯に力を入れ始めてい

るのも、元を正せば交番が交番の役割を果たさなくなったということと無関係ではないはずです。犯罪への抑止力という意味からも交番にはきちんと警察官を置いていただきたいと思います。

　あと、震災後の復興にも関わりますけども、公園を作ったら作りっぱなし。あとは自治会さん、ボランティアさんお願いしますでは、あまりにも無責任だと思います。同様のことが、復興のシンボルにもなっている「希望のリンゴ」にも言えると思います。最初はお世話をいただいた方々も１０年経てば１０歳年を召される。掃除やお世話をお願いするのも良いけれど、後々の仕掛け作りには関わられたほうが良いのでは、と思います。いろいろと申し上げましたけど、よろしくお願いします。

（企画）ありがとうございます。最後にご指摘をいただいた点などは、まさに次代の変わり目というか、自分たちのまちをこれからどうしていくかという自立の問題と、変革の時期を凝視がどう仕掛け作りに積極的にかかわるかと言うことに尽きるのかもしれません。何れにしましても、協働と参画のスタイルが根付くまでには中身の濃い時間が必要なような気がします。これからも、行政に足りないところをご指摘いただきながら、少しでもすみ良いまちを創っていきたいと思いますので、よろしくお願い致します。本日はお忙しいなか、本当にありがとうございました。

市民の方々が撮った、震災当時の写真集
「伝えたいあの日」
―芦屋市民による芦屋の記録―

震災を伝えていく手段の一つにと
ボランティアグループ「とまと」が編集し、
平成１１年６月に発行しました。

下記の HP でもご覧いただけます。
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/eqb/book/1-291/

芦屋経済人会議代表幹事・芦屋東ライオンズクラブ
石 本 章 宏 様
日時　平成１６年１２月１０日（金）午前１０：００～１１：４５
場所　芦屋市浜芦屋町（有）芦屋石油事務所

（企画）おはようございます。お忙しいところ、またお仕事中のところ事務所にまで押しかけまして恐縮です。本日は現在、芦屋市が取り組んでおります「震災復興１０年事業」の一環として震災当時の石本さんはじめ芦屋東ライオンズクラブとしてのご活躍や、苦労話などをお話いただき、今後に備えるための貴重な教訓を残していきたいと考えています。他にも、これからの若い世代に対するお考えなどを含めて幅広くご自由にお話をいただけましたら、それも幸いかと考えておりますのでよろしくお願い致します。

　では、まずは震災直後は、どのような状況でしたでしょうか。

（ライオンズ）ライオンズとしての動きは取れなかった。わたしの本業も本業なので気が付いたら震災復旧・復興の真っ只中に放り出されたような状況だった。ただ、そうはいうものの、現在までにこういった取材がなかったことを考えれば行政もようやく目に見えない部分に光を当て始めたのかなと、見えている部分はみんなが知っているけど、本当はその見えている部分を支えている見えない部分にも大変な苦労があっただろうと、今回の目の付け所は良い。ただ、ご希望のライオンズとしての活動という面では話せることはない。なぜか、それぞれが職業人としてその立場の延長線上で復旧・復興支援に入り込んでしまってるから。そう理解してもらえますか。

　そういう意味から言うと、わたしの話を聞いてもらえれば大なり小なりライオンズの面々は似たようなことをやってるという風に理解してもらって結構です。

（企画）なるほど、確かにそういう事かも知れませんね。元々得意分野があるというか、社会的な立場がありますから、その面でのご活躍が一番の早道、ですね。

　では、石本さんご自身の「あの日」からお話しいただけますか。

（石本）東灘の仮自宅から、自転車でここに来ました。はじめは２号線を走ってきたのだが、雨でもないのに側溝を赤いもの流れていた。住吉川の手前で４３号線に向かったがあのあたりの建物はほとんど平屋に変わっていた。病院も潰れて患者とベッドは路上に運び出されていた。少し開けた空間に安全を求めて人が集まっていた。消防署員が決死の覚悟で宅内に入っていくのも見た。フィルムを見ているように冷静に見ていたし、これは大変なことになっていると、えらく冷静に思ったことを覚えている。４３号線に出ると阪神高速が横倒しになっていて、これも横目に見ながらひたすら会社を目指した。遠目に三菱のマーク

が見えたときには内心ホッとした。これで何とかできるという思い。ガラスは全面が割れてたけど何とか通電していたことをはじめ設備類に不具合はなかった。

天祐か。そう思った瞬間を見透かしたかのように、後藤さん（当時の芦屋市助役）から電話があった。緊急車両への燃料補給を頼みたい、伝票はすべて芦屋市に回してくれ、との事だった。震災時にとりあえず通話可能であった公衆電話からの連絡だったが、要は、赤と白黒とネズミ色の車に優先して燃料を補給してくれということで、タンクの残燃料を考えると当面一般車両への給油は控えざるを得なかった。

（企画）一般車両といえども、緊急性は人それぞれにあるなかで、これをお断りするというのも大変だったと思いますが。

（石本）そうそう、喧嘩ですわ。それぞれの身に大変なことが起こってて亡くなった身内のこと、病院へ行くこと、このたびの新潟と同じように自宅に入れず、避難所ではなく車内で暖を取りたい事情があること。様々な事情がご本人にとっては一番大変なことになるわけですから複雑でした。しかし、次から次に緊急車両が給油しにくる状況下で、次の（スタンドのタンクへの）補給が道路事情を含めていつになるかわからないことがあったので、こちらとしてはお断りするしかなかった。うちで給油する緊急車両（機動隊のバス等）が県芦を超えて並んでいる状況だった。これも、あとから聞いたのだが、後藤さんのあの電話はうちのスタンドを「緊急指定」にするという意味であり、その瞬間からラジオやテレビでうちのスタンドを含む１０数ヶ所が案内されていたらしい。

震災直後はご存知のように、神戸へ神戸へ草木もなびくやから、東からきた車両は、被災地神戸に入る直前であるうちのスタンドで給油していく。

（企画）大変な状況ですね。神戸入りする緊急車両は全て芦屋石油で受け入れてるみたいな状況ですね。

（石本）そう、毎日、早朝から深夜の１時、２時まで燃料を補給しつづけた感じです。

消防車両や各県警のバス、静岡や神奈川からきて高速を降りる。４３号線を走ってきていよいよ神戸に入るというタイミングでうちのスタンドがある。絶妙やわね、場所的に。入れても入れても、県芦の交差点まで並んでる車両が減らない。特に県警のバス等は燃料としての軽油と、暖房用の灯油を別々に給油することになるから時間がかかる。

（企画）そんな状況がいったいいつまで続いたのか。

（石本）一週間ぐらいかな。いったん神戸に入った緊急車両は別の給油場所を見つけよるから、落ち着き始めた。この頃はタンクへの補給水準も把握できとったから、余裕のあるときは、誰にでもという訳にはいかんけど一般車両にも夜来てくれたら給油出来るぐらいの状況にはなっていた。

電気は消してたけど、僕は居てたから。だから、本当に困ってる人なんかは夜に来てくれてた。

（石本）あと、こぼれ話としてはジャッキが大活躍した。倒壊家屋に差し込んで大切なものを取り出す場合に便利に使えた。このジャッキのおかげで何人かは助かったと聞いて得もいえず嬉しかったのを覚えている。

（企画）燃料補給だけが役割ではなかったわけですね。ライオンズクラブとしての被災状況などはどのようなものでしたか。

（石本）犠牲者はでなかったけど、駅前のライオンズの事務所は平屋になってた。

（企画）当時の状況下で、燃料補給以外でお困りになったこととか、大変だったということなどがあればお話しください。

（石本）水が出なかったのには参った。だんだん腹が立ってきて井戸を掘った。
（企画）エッ、井戸を掘られたのですか。
（石本）もともと、掘りたかったというか。掘ってみようという計画はあったし、ここらあたりは７メートルも掘れば出るという話も聞いてたから。
　でも、そのおかげで風呂も入れたし、付近の人も潤ったよ。チョッと経費はかさんだけど。
（企画）それは、それはありがとうございます。井戸は今も現役でがんばっているということですね。次のご質問ですが、あの震災の前後で石本さん自身の変化というか、人生観が変わったというか、そういったところは見受けられますか。
（石本）自分自身のココが変わったというふうには表し難いけど、何らかの変化はあると思う。あれほどの経験をしたんやから、誰しもね。変わったと思うよ。
　会員の中には明らかに変わったなと思える人もいる。人とのかかわりを大事にするようになったとかね。
（企画）なるほど、そういう変化はないとおかしいというか。特異体験ですからね。その会員の中にはという話が出ましたが、ライオンズクラブのご紹介などもいただければ幸いです。
（石本）ライオンズクラブは子クラブ、孫クラブを含めて現在市内に５つ在ります。元をたどっていけば、１９１７年にアメリカイリノイ州のシカゴで保険の外交員が「ひとりではダメ、集まろう」と欲したのが始まり。
　モットーとしてはWE　SERVE　⇒「われわれは、奉仕する」が原点。
　日本では神戸ライオンズクラブが東京ライオンズのスポンサードで３番目に出来た。神戸は３番目なのに、各国毎に一つしかないホストクラブになっている。いわば日本のライオンズクラブの代表は神戸ライオンズクラブだということになる。
（企画）３番目なのにホストですか。
（石本）歴史的な経過があって、本来東京であるべきなのかも知れないが東京ライオンズクラブが過去に存続の危機に瀕したことがある、その時に東京をサポートしたのが神戸だったようだ。そのことに敬意を表してホストの名称は１９８１年から神戸に冠せられている。
　芦屋での歴史を言えば、芦屋ライオンズクラブの設立が１９６１年の４月で、芦屋東は、その５年後の６６年４月になる。
（企画）芦屋にはいくつのライオンズが活動されていますか。

（石本）芦屋東ライオンズクラブの子クラブとして、「業平」・「ハーモニー」・「クオリティ」の冠をつけたライオンズクラブが３つ在る。
（企画）それぞれ、特色のある活動を行っておられるということですね。
（石本）と言うか、まぁ構成員によって活動に特色が出るという方があたってるかな。ライオンズの大本の役割と言うか、使命みたいなものは１９２５年にオハイオ州で開催された第９回世界大会でヘレン・ケラーがいみじくも言ってくれた「ライオンズよ、闇を開く十字軍の騎士たれ！」と言

うところかな。有名な目の不自由な方の「白い杖」はライオンズクラブの奉仕活動の賜物です。あと、活動の骨格としては、「青少年育成事業」や「薬物乱用」問題などには積極的に取り組んでいます。

（企画）幅広いことと、「白杖」のように社会に完全に根付いている取り組みがあるところなどに凄みを感じますね。あと、お時間も圧しておりますので、最後に、これからの若手というか後進に期待すること、あるいは行政に対して思うことなどがございましたら是非とも一言いただきたいと思います。

（石本）若い方は、自分のことを優先する場合が多い。わからないことはないが、ことの軽重を考えて、自分のことを後回しにする時があってもいいのではと思います。行政に対しては、おのおのの本分があるわけだから、その職分をキッチリ果たす、もし一致して一緒にやった方がいい場合にはそうして行くという程度でどうですか。

（企画）ありがとうございます。本日はお忙しいところ、また、お仕事中にも関わりませずお邪魔をいたしました。冒頭、聞かせていただいた見えないところで頑張っている人がいる、その人たちを大切にという言葉には深く考えさせられるところがございます。

これからの行政、お金もない、人もないにとどまらず広くご活躍の皆さんとともに、新しい仕組みを目指していきたいと思います。本日は本当にありがとうございました。

芦屋川ロータリークラブ
会長 山路 正明 様・副会長 坂口 友彦 様・永瀬 純治 様・若林 益郎 様
日時　平成１６年１２月１３日（月）午後２：００～３：３０
場所　山村サロン

（企画）お忙しいところ、お邪魔いたしまして恐縮です。
　本日は現在、芦屋市が取り組んでおります「震災復興１０年事業」の一環として震災当時のロータリークラブさんの活動や会員の皆さんの状況、あるいはこの間に取り組んでこられた事業についての苦労話や行政へのご意見などのお話を貴重な教訓として残していきたいと考えておりますのでよろしくお願い致します。

（企画）では、まずは震災直後の状況をお聞きする前に、芦屋川ロータリークラブのご紹介などをいただけますか。

（ロータリー）芦屋ロータリークラブは昭和２７年の発足ですが、わたしたちの芦屋川ロータリーは今年で１５年目という若いクラブです。活動はご存知のように事業や専門業務を行う者の異業種交流と人道的奉仕活動を行うことを通じてあらゆる職業における道徳的水準を守ることにより、世界規模での相互理解と平和を希求することを目指しています。

（企画）本年が１５年目ということになりますと、震災当時は非常に若い「クラブ」と言うことになりますね。地震直後のクラブの状況や活動内容などをお聞かせ願います。

（ロータリー）そうです。若いだけに反応も早かったし、実行力もあった。若さが幸いした一例かもしれない。当時の会員が５０人程であったが、そのうちの９名がドクターで、このドクターが目を見張る活躍をした。ロータリークラブは専門分野に長けたものの集まりだから、ロータリーとしての活動よりもそれぞれの得意分野を生かしていくことで各々がその分野で中心的に活動できたと考えている。

（企画）なるほど、一番手っ取り早く効果の大きい手法が望まれるまでもなく実行できたと言うことになりますし、そういうお話を聞くとやはり「人」の存在と「人」の集まりと言うのは強みを持っていますね。ああいう状況下でのドクターのご活躍の幅と言うのは主に外科系ということになるのですか。

（ロータリー）外科・内科どころか、精神科を含めた臨床全般をフォローしてる。一番広範に、かつ柔軟に受け入れたと言うか現実的な対応が出来ていたと思う。
　ただ、今にして特別なことをしたという思いはない。ああいう状況のなかで、あるべき職業人としての役割を当たり前のように果たしたと言うことであって、その密度が濃かったという意味での大活躍と言うことになる。だから、逆に怪我をされた方や、お亡くなりになった方が三日も放置されていたという目の前

の事実に無性にいらついた面があった。

（ロータリー）そうですね。クラブとしての活動と個人としての活動が多くの部分でラップした。それは、日常（平時の活動）においても同じで、あらかじめ日常に刷り込まれたものでないといざと言う時に役に立たない。わたしたちは、翌週月曜日の例会、実は震災の当日が例会の日（月曜日が振替休日であったため火曜日に予定されていた）でしたが、当然開催できなかった。

（企画）例会は、会員さんの安否確認と言うことで開催されたということでしょうか。

（ロータリー）例会では会員の安否確認と現況報告と言うか、それぞれの立場、関わりのなかで目の前の震災とどう向き合っているかと言うことが確認できた。ドクターのこともその時に全体が把握でき、今後のことを考え始めることができた。全員ではないものの、すぐに集まってこれからのことを考え始めることができたというのも、会員内に幸いにも犠牲者がなかったと言うことと、先ほどらい発言のあったクラブそのものが発足から５～６年という「若さ」を持っていたと言うことが大きな要素だったと思う。

個々の会員が専門性を生かして取り組んでいること、あるいは取り組んでいるなかから抽出した問題点などに素直に反応も出来たし、理解して必要だと思えば、直ぐにでも実行に移すための思考方法が採れた。T 先生から提起のあった「心のケア」支援プロジェクトなどはその良例だと思う。

（企画）壊滅的被害の粉塵さめやらぬ時から、既にその必要性を口にされ事業化にむけた熱意を持って取り組まれたというお話は、その先見性というか日頃の経験なかりせばと言うか背筋がゾクっとするような凄みが伝わってきます。そういう、先進的な取り組みをはじめ多くの関連事業を手がけられたロータリークラブのご活動をお話しいただけますか。

（ロータリー）一つには、「足長おじさんプロジェクト」があります。これにつきましては、実はロータリークラブがやってるということを公表しておりません。

当然のことながら「足長おじさん」ですから最後まで誰かわからないと言うのが建前になっていますので、ご了解を。

中身としましては、義務教育である小学１年生から中学３年生までを対象に２０、０００円／月で実施しました。

※ 足長おじさんの正体を、市の企画課が明かしてしまうことについては賛否両論ございましたが、ロータリークラブ側に重ねてお願い申し上げたところ、１０年の節目にあたり、そろそろ良いだろうというお考えと、さらには、感謝された利用者の皆さんの中には、うすうす感づいておられる方が少なくないということから、記載することの許可をいただくことが出来ました。
(^o^)足長おじさん、ありがとうございました。（企画課）

（企画）立ち上げが早いですね。まだまだ、どうしようこうしようってやってる時期に既に実施に移してるあたりは先程からお話の出ておりました組織の若さ、その強みかもしれませんね。

（ロータリー）足長おじさんは見えないようにやってきたという特色があるけど、逆に見えにくい取り組みの一つとして三田谷学園の歴史的な福祉資料の復旧とデ

ータベース化にも主体的に関わっています。既に終了したプロジェクトですが残した「財」としては大きなものがあると思います。

（ロータリー）有名と言うか、目に見えるものでは芦屋公園の「鎮魂の碑」がありますね。震災から２年目でしたか、稲畑さんにもご無理を申し上げたり、もちろん会員の浄財に負うところが大きかったりと、様々な方の助力がなければ出来ないことではありますが、「１．１７祈りと誓い」でしたか、行政の取り組みとも連携して長く震災を語り継ぐ、そして命の尊さや安全について考える礎になれば幸いです。

（企画）ロータリークラブご自身は、人の力と浄財の賜物とおっしゃいますが、そういった思いを形にしようと働きかける核の部分がなければ成り立ちませんから、やはり、その功績は計り知れないと思います。

（ロータリー）「希望のリンゴ」は、大阪からだったかな。

（ロータリー）そうだ。梅田ロータリーの申し出で、うちが行政と調整して場所やお世話する仕掛けをつくった。いろんな意味で根付いたかなと、思う。この取り組みなんかを振り返ってみるとロータリーに限らず組織というか横のつながりは大切だと思う。梅田ロータリーにも「芦屋市」と関わりのある方がおられて、その縁で成り立った訳ではないけれど、調整がしやすい。通じる部分があるからネ。

（企画）まぁ、クラブ会員同士であれば根っこというか、お話を伺ってる範囲でも「精神」・「気持ち」といった部分が共有されてるような気がします。

（ロータリー）気持ちを繋いでいくと言う意味では、来年の３月に植樹祭をやる。「市民の杜づくり」プロジェクトと銘打ってますが総合公園の一角に場所を確保して１１７本の苗木を植える。樹種としては二種類で樟とメタセコイヤを計画している。自然に馴染んで自然災害の厳しさにも耐えるようになるまでに５０年や１００年はかかるだろうが大切に大きく育ってくれることを願ってる。

（企画）付近住民の皆さんや市民の憩いの場となると同時に、往事を振り返って、静かに「時」を語り合うことなどができるように育てて行かなければなりませんね。

（ロータリー）あと一つ、大切な取り組みが「心のケア」支援プロジェクトとして継続している。ＰＴＳＤという言葉が新聞紙面などで躍る以前から取り組んでいるが、本当に大切なことだと思う。行政サイドでも様々な支援プログラムや財政支援の打ち切りが続いているが、必要性だけでいえば「まだまだ、これから」という気がする。ただ、わたしたちも会員からの浄財を募ってということになりますので限界も感じながらということになりますが。

（企画）そういう意味で行政に対しての役割分担はじめ、何らかのご提案のようなものはございますか。

（ロータリー）芦屋市には、ご存知のように精神障害者の授産施設がない。どうしても基準にいうところの１５万人の人口規模に対して一箇所という枠が足枷になっているので芦屋市が一方的に悪いということではないが、「心のケア」支援プロジェ

クトとの連携もあって何とか手の届かないところに行き届いたサービスが提供されるように市長の英断を求めているところです。

こういった作業所があるとないではその人の将来に対する可能性が大きく左右されかねない。法規制上の限界はあるのだろうが、力を合わせることで何とか突破できないかと考えている。ニーズと要望は間違いなくあるのだから、何とかしたい。

（企画）合併して、スケールメリットを得るのか、それとも合併しないなかで何とか別の方法で新たなサービスを提供していくのかという知恵の出しどころのような気がします。芦屋市は合併しないのだから、知恵を出していくしかないような気はしますし、そこに行政とともにという考え方が成り立てば、もともと、その分野に弱点と課題を抱えている現状に鑑みれば、おのずと答えは導かれそうな気もいたしますが、どうでしょうか。

（ロータリー）それ以外に、防災防犯面で一言。最近のケーブルテレビを見ているとひところほどに防災関連の番組が組まれていないし、流れていないように思う。危機感が後退しているのかとも思う。いくら良いマニュアルや体制を組んでいても機能しなければ意味がない、まして、市民ひとり一人に浸透させるための仕掛けがないと結局のところは前回と同じ轍を踏むことになる。ケーブルの広報チャンネルでは繰り返し事前の心がけの必要性を訴える、慰霊碑の前では自然に手を合わせる。命の尊さや、あの時の悔しさを常に頭の隅においておけるようにしなければならない。

（企画）そのとおりだと思います。このたびの新潟に鑑みても、人間には「まさか」の気持ちが常にある。わかっていても緩む部分なので、しつこいほどに繰り返し訓練しておく、有事に備える心を養っておくことが必要だと思います。

（ロータリー）財政に関していえば、芦屋市としての特色を活かして勝負して欲しい。何のための「国際文化住宅都市建設法」なのかと頭をかしげてしまう。世界に通用する日本のまちをつくるための法整備がなされているのだから、あとは、これを実践することに集中して欲しい。特に、被災経験を生かしたことを加味して今後のまちづくりを行っていくならば日本にふたつとないまちづくりが出来ていくと思う。偉大な先達たちの功績を無にしないように頑張って欲しい。

（企画）ありがとうございます。時代に合わせて法の効力を当てはめなおすことを含めて、今後のまちづくりに生かしていく必要があるという意味ではまったく同感です。これからも、ご指導よろしくお願いします。

（ロータリー）最後に、もう一言。最近の少年非行というか教育の問題には目を覆うものがある。もちろん学校だけではなく、家庭でも、地域でも従来から持っていた教育力をなくしているのだろうが、このままでは日本がダメになるぐらいの大きな問題として捉えて取り組む必要があると思う。何とか、いい知恵を出し合って取り組んでいきたい。

（企画）ありがとうございました。わたしたち今の社会の大人はどうなのか？ということを含めまして、将来を憂う事態になりつつあるということに間違いはないわけですから、小はくらしのマナーから、大は社会参加の機会（雇用機会等）拡大を含めて、社会全体で取り組んでいかなければならないと思います。本日は、例会の後のお忙しいお時間をいただきまして、また、従来からの幅広い活動と社会をプロの視点から多面的に見る角度でたくさんのご意見をいただき、感謝しております。今後とものご指導をお願い申し上げて終わらせていただきます。本日はありがとうございました。

株式会社　永 瀬 ・芦屋建設事業協同組合会員
代表取締役 永瀬 純治 様 ・ 相談役　永瀬 禎二 様
日時　平成１６年１２月１６日（木）午前１０：００～１１：３０
場所　（株）永瀬・応接室

（企画）お忙しいところ、押しかけてしまいまして恐縮です。
　本日は現在、芦屋市が取り組んでおります「震災復興１０年事業」の一環として震災当時の永瀬建設さんのご活躍や、建設事業協同組合さんのその後の活動、会員の皆さんの被災状況、あるいはこの間に取り組んでこられた事業についての苦労話や行政へのご意見などのお話を貴重な教訓として残していきたいと考えておりますのでよろしくお願い致します。
　では、まずは何を差し置いても震災直後の状況をお聞きしたいと思います。
（永瀬）当初は混乱を極めていた。わたしも市の対策本部（庁議室）と警察、消防を行き来して、ようやく情報に対する確認が取れたほどに錯綜していた。当時で言えば自衛隊の無線が一番的確であったように思う。
　いろいろ、飛び回ったように思うが、振り返れば会社というか、具体的には社屋と従業員はじめ関係者に大きな被害が出なかったことが第一で、そのことが後々の活動を支えてくれてのだと思う。被害があれば、そうとばかりもいってられない面が出ていたかも知れない。
（企画）確かに建物や従業員の皆さんに大きな被害が出なかったというのは偶然なのか必然なのかは別にして、大きな要素ですね。

（永瀬）もちろん、中は見るも無残な状況だったが建物本体に被害はなかった。
もちろん周りの被害は相当なもので、何しろ両隣の建物はうちの建物にもたれているような状況でしたから。
（永瀬）わたしは、まず市内を回った。いくつかの仕掛かり現場を中心に回ったわけだが、そのおかげで市内全体の大まかな被災状況が把握できたかもしれない。
　電気は来てたが水はダメだった。見回りの途中で市民センターのピロティの柱（ＲＣ造）が座屈しているのも見た。家からガレージまで行ったところで大学生に道路が動いていないという情報を得たが、まだまだ、地震直後で早朝でもあったことから、ある程度の移動距離は稼げた。
　得意先の安否確認に回らせていただいたが、幸いにも大きな被害はなくほとんどといって良いほどお声を聞くだけで後回しにさせていただいた。周囲の状況があまりにも凄惨だったからだ。ガレージから西の空が燃えているのが見えたが前田町の火災であったことも分かった。

（永瀬）作業場には７：２０ごろに到着したが、数人の社員が出社しており無事を確認できたことが本当に嬉しかった。とは言え、彼らも直ぐに人命救助に走り出してしまった。二次災害などに注意するよう大声を出したが、人命がかかってるとなるとなかなか聞いてくれず、行ったきりになってしまい、また心配することになった。

（企画）当時としては当然かもしれませんが、あらためてお聞きすると素晴らしい社員さんですね。

（永瀬）その後、午後７：３０頃に社屋に着いたが両側から倒れかかっている建物に阻まれて屋内に入れなかった。そこで隣家との隙間から窓ガラスを破砕、入り口を開けてなんとか入れるようになった。目の前を小学校に避難する人の波が終わることのないぐらいに通り過ぎていた。

（企画）社員全員の無事が確認できたのは何時ごろなんでしょう。

（永瀬）飛び出していった社員が全員戻ってきたのは午後７：００頃だった。二次災害に遭ってないかと気が気ではなかった。日没の悪条件もあり、心身ともに疲れきった社員をその日は帰した。

（企画）そして、翌日には市役所から様々な要請があった。

（永瀬）そう、朝７時ごろに後藤さん（当時助役）の指示で市の建築課が自宅を訪問してくれて、わたしたちの安否を尋ねられ、無事が分かると当社の職員と工具の手配を依頼されたが、あいにく私は既に出社していたので行き違いになった。

　連絡が通じたのは午前１０：００頃だったと記憶している。その日は午前８：００ごろに消防署から「人命救助」の要請があって出勤できている社員を集めて順次手近なところから助け出しに出動させていた。何しろ数が数なもので一時は誰がどこに行ったのか皆目分からない状況があった。

　これではいけないということで１２：００前後には社内に対策本部を設置して救助要請の「受け入れ」と「行動指示」を整理し、場所・人数・行動内容などについて市の対策本部・警察・消防と連絡を取り合うようにした。

（永瀬）自主的な救助活動を含めて、１７～１９日の３日間は命懸けだった。帰ってくる社員は目だけが異様に光っていて、後は泥だらけ、ほこりだらけで誰が誰だか分からない。本当に良く頑張ったと思うし、見ていて涙が出た。

　当社の社員が全員無事で活動できたことを、神がわれわれに与えられた使命として受け止め、平素付近をお騒がせしていること（騒音）や、ご協力いただいていることに対して、ここは一番身体を張って社会奉仕に励むいい機会だということを何度も繰り返し社員には伝えた。よく応えてくれたと思うし、これからも社会の役に立っていくいい経験だったと思う。

（永瀬）加西の自衛隊が食料を運んでくれたが、輸送経路の問題があって芦屋まで届かないという事もあった。後藤さん（当時助役）から、取りに行ってくれという連絡があったので出来るだけ多く積み込める車両を用意して県庁の１号館まで出向いた。ところが、そんなに数はない。

１台のワンボックスで足り過ぎるぐらい足りてしまう。まだまだ、そんな状況だった。

（永瀬）結局帰ってきたのは、２０：００を回っていた。道路が寸断されて迂回路を探してるうちにパトカーに止められ、事情を話せば先導してくれたということだが、それでもこれだけ時間がかかったのが当時を良く表している。

（企画）そうですね。結局のところ災害時においても最終的にはマンパワーがものをいう。そのマンパワーが絶対的に不足していたのが震災直後の状況だったと思います。そのこともあって、後藤助役が永瀬建設さんに人を要請したことは的を得ていると思うし、永瀬建設さん側に被害が少なかったというのも天の配剤で、いくつかの偶然が妙な説得力を持って絡み合っているように思います。

（永瀬）そう、マンパワーに尽きる。あの時も、市内のいたるところに重機が遊んでた。うちには重機がないけど、ユンボとかが使えたらもう少し多くの人の命を救えたかもしれないと何度も思った。如何に有効な機器も、それを操るマンパワーがなかったらただのガラクタです。

思い出されるのは、鳴尾御影線沿い倒壊家屋で救助作業をしている時に、大型のトレーラーに詰まれたユンボが通った。たまたまやけど、お願いしたらユンボで大きな梁や柱、屋根を上げてもらえて、３人助かった。一番奥で一人なくなられたけど、手伝ってもらえてありがたかった気持ちと、手元に重機がない悔しさを同時に味わった、そんな経験でした。

結局、４日目（金曜日）からは自衛隊が来て大きな機械で作業を始めた。

私たちは最初の３日が勝負やと思ってたこともあって人命救助からは撤退させていただいた。その頃になると仮設トイレの設置作業が急務になっていた。

解体作業もあったしね。

（企画）このたびの総括・検証作業でも、救命救急作業は最初の３日間が肝心との結果があちこちから発表されています。

マンパワーも、それ以降になると徐々に整い始めますし、やはり、初動の３日間に如何に迅速に対応できるかが岐路になるように思われます。

（永瀬）そう。それとマンパワーでも指示のできる人が必要です。ああいう状況になれば隣近所の人たちを、ほとんどの人間が助け合う気持ちにはなる。ただ、具体的にどうしたら良いのかが分からなくて立ちすくむ、というか一歩が出ない。そこで、リーダーの存在です。リーダーが一声かければ全体が動く。そのことも実体験として学びました。

（企画）なるほど、そのとおりだと思います。当時の役所が普段の職制ではないルートで機能的に動き始めたのも職制を無視してやらざるを得ない状況を全体が認識できた時からでした。ただ、次に備えるという意味では、職制がそのスキルを全うしていることが必要になるとは思いますが。

（永瀬）助け合うといえば、普段からの取引先には本当に助けられた。特に言えば大阪方面からの搬入がし易かったのか多くの支援物資をいただいた。なかでも、生理用品にいたるまでの生活必要品をいただいた時にはその行き届きように驚いたことを覚えている。あのへんは本当に困っている人の身になって考えないと出てこないのではないか。

（企画）教えられるのは、多分、日常的な平時のお付き合いがよほどしっかりしていないとそうはならないのではないか、と言うことですネ。後、社員の皆さんが人命救助に奔走されたというお話もそうだと思えます。やはり日常的な教育がしっかり出来ていないと、いざという時にものの役に立つか立たないかの大きな差が生じるように思いますが、どうですか。

（永瀬）当時の社員が５０名ぐらいで、業者さんやその他の関係者を含めると総勢で１００名前後になったと思うが、それぞれが自分の役割を自覚してよく動いてくれたことに感謝しています。

（企画）組合としての組織立った動きはどうでしたか。現在は応援協定を結んでいただいて、万が一の時には重機などを含めた支援体制を組んでいただけると言うことになっておりますが、当時の建設業協働組合としてはどんな動きになっていましたか。

（永瀬）当時はそれどころやなかったという意味を含めて、これといった組織だった活動は出来ていない。震災から２ヶ月程度立った頃に、建築、土木、水道、電気等それぞれの専門家が一定の地域内に存在しているわけだから、建物被害に関してはどのような対応でも可能だと考え、地域ごとでチームを作って取り組むことを考えたことはあったが、実施はできなかった。

（永瀬）そう、例えばこれは教訓にも属することがと思うのですが、倒壊建物に近づく時は大工を１名加えておくことが効果的である。危険度判定と言うか、造るのも壊すのも理屈がわかっているので即時に判断できる強みがある。後は、先ほどから出ているリーダーの存在も必要になる。

当時はみんな必死で動いており、建設業協同組合としての行動はそこまで行かなかった。

社員は毎日、地域の人達の救助や片付けに奮闘してくれていたが、会社としての収入がないわけで、1か月ぐらいしたときには会社がもつか心配になってきて、「会社をつぶす気か」と言ったこともあった。

（永瀬）「いままで続けてきたもんがそんな急にやめられるか」言うて、大喧嘩したこともあったけど、幸いなんとか今日まで来ました。

（企画）ありがとうございました。最後に一言、行政に対してでも結構ですので残しておきたいことを話していただけますか。

（永瀬）私事だが、子供があと２年欲しいと言ってきた。あらためて、建築の勉強をしなおすためだが、私たちや行政はこのように人の人生観を変えてしまうような体験をした訳だから、その後も揺らぐことなく真剣に取り組んでいく必要がある。当時のことを１～１０までもう一度点検しておいて欲しい。急場をしのぐ為に様々な立場の人が一致して協力したが、２回目はそうはいかない。相当つめて各々の役割を決めて、それを繰り返し繰り返し訓練しておく必要があるだろう。

それと、いったい行政は一つの命令が組織を走り抜けて末端まで浸透する仕掛けになっているのかと疑問に思うことがある。単純に上から下まで命令が通

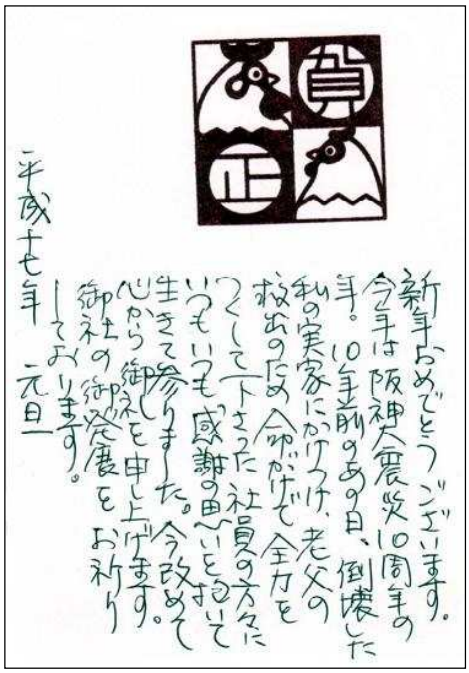
るのか、ということだが、どうもそう云う風にはなっていないように思う。皆がバラバラの事をするのではないかという危惧がある。

あとは、日常的に危機感をもっておくことが大切だと思う。例えば、先頃の台風時に大量の雨が降ったが開森橋は大丈夫だったか、という事。今回は大丈夫だったが、では、どこまで雨量が増えるとヤバイのか。構造的に事前の策は打てないかという事。これらのことを先送りにした結果で災害の被害が出ると、これはまさしく人災ということになる。市の職員がもっと市内に住む必要があると思う。市営住宅などに住まわせて地域の情報に精通させ、いざという時は迅速に対応できるよう、もっと緊張感を持って、トップの決断を求めたい。

（企画）ありがとうございます。現場に直接入って指揮された方のお話にこそ臨場感があってビンビン伝わってくるということを実感しました。

それと、日常が如何に大切かということが机上ではなく真実として伝わってくるお話しも含まれており大変勉強になりました。いくらきれいなマニュアルを作って形だけ整えてもダメ、実戦で役に立つように繰り返し訓練しておくことを大切に伝えていきたいと思います。本日は、ありがとうございました。

※　平成１７年元旦に、1通の年賀状が届きました。
それは、１０年前に本通り商店街で、救出できた方のご家族からの、（株）永瀬の社員に対するお礼の年賀状でした。



関西電力　阪神営業所
地域共生係長 不老地 政臣 様 ・保全主任 小笹 晃一 様
日時　平成１６年１２月１７日（金）午前１０：００～１１：３０
場所　関西電力（株）会議室

（企画）お忙しいところ、会社にまで押しかけてしまいまして恐縮です。また、平素から市の防災会議ではお世話になりありがとうございます。

本日は現在、芦屋市が取り組んでおります「震災復興１０年事業」の一環として震災当時の関西電力さんのインフラ復旧に関するご活躍や、その後の活動、社員の皆さんの被災状況、あるいはこの間に取り組んでこられた事業についての苦労話や行政へのご意見などのお話を貴重な教訓として残していきたいと考えておりますので、どのようなことでも結構ですので、１時間半程度のお付き合いをよろしくお願い致します。

では、まずは何を差し置いても震災直後の状況をお聞きしたいと思います。

（関西電力（以下、「関電」という。））

現在は、阪神営業所が芦屋市を所管しておりますが、当時は西宮営業所管内に芦屋市が位置しておりました。私は、当時、その西宮営業所に勤務しておりましたので、住所も芦屋市大東町の社宅にあり、そこで被災したということになります。

（企画）そうですか、大東町ですと相当な被害に遭われましたか。

（関電）まぁ、家の中はご多分に漏れず惨憺たる状況でしたが、社宅のほうは壁に一部クラックが入った程度で大したことはありませんでした。ただし、外に出てみるとあちらこちらで電柱が倒れていますし、電線が垂れ下がっております。

これは大変な事になっているということで、３日分の着替えを持って自転車で家を出ました。

（企画）そこからは、泊り込みということになりますか。

（関電）はい、会社に出ますと三々五々集まってくる社員を手配して、それぞれの現場に配置する作業が矢継ぎ早に発生しました。何しろ災害の規模が桁違いに大きい事と、初動時にはまだまだ営業所単位の対応となっていたものですから、マンパワーを集中するにしても自ずと限界がありました。

（企画）ああいった、大規模な災害の場合はそれぞれの営業所単位で判断して、初動体制を作り上げることになっているのですか、それとも中心となるセンターが機能を発揮して全体を俯瞰する形で指示を出していくことになるのですか。

（関電）当時という意味でいうと、取り立てた取り決めやマニュアルは存在しておりませんでした。通常の場合は設計部門が中心になって全体を取りまとめていくことになります。災害への対応はそのためのマニュアルがあるということではなく、普段の事故対策マニュアルが日常的な訓練の中で身体に染み付いており

ますので、それを拡大適用していくことになります。

（企画）なるほど、当時電気の復旧が一番早かったのも日常的な訓練が徹底されていたことと、日頃からの事故対策（頻繁にあるという意味ではありません。）により、危機感を持続して業務にあたっているというところが大きいのですね。

（関電）はい、ですから初動体制についても最大規模のものが瞬時に配備できます。芦屋市さんは市内居住の職員が少なく初動期の体制が構築しにくかったという話が当時もありましたが、関電の場合、それでは普段のサービス（事故対策）が提供できませんので既に構築されたものを使ったということになります。ただ、先程も申し上げたように災害の規模があまりにも大きかったという不測の事態ではありましたが。

災害発生時に、何よりも必要なのはマンパワーですから。

（企画）事故対策に関する危機管理意識や体制の確立につきましては、さすがの思いを強くしました。また、だからこそ、私たち生活者は平穏な日常がおくれているのだという事を今さらながら感じております。では、次に今回のことを経験されて、あのような大規模な災害にも対応出来得る新たな対策のようなものがその後に講じられたという事になっていくのでしょうか。

（関電）はい。極端な話をいたしますと大部分の架電は現地に行かずとも机上のボタンで送電が再開できるようになっています。

（企画）エッ、送電線の二重化ですか。

（関電）イエイエ、二重どころか相当数の多重化になります。やはり、災害に強い設備整備ということも考えられて、その角度からの強化もいたしましたが、やはりライフラインですので、万が一破壊されたときにも出来るだけ早期に送電が再開できることが大切かと考えます。そのための多重化を終えています。複数の変電所から多重線を使って電力が供給出来るようにしているという意味です。

まぁ、発電所や変電所が破壊されてしまえば、一単位の営業所が対応できる範囲ではなくなりますが。

（企画）素晴らしい対策かと思います。今回だけのことを取り上げても極めて早い復旧に驚きましたが、その上にさらに改善されたというところに凄みを感じています。

（関電）今回の復旧で、他のライフライン関係よりも早期に復旧できましたのは、電線が地上にあるということが最大の要因でしょう。

（企画）なるほど。上下水道やガスのように地下に埋設していないということが逆に復旧のしやすさにつながったということですね。ただ、震災後には共同溝的な考え方でインフラ関係を整備する、そうすることが今後の安全性の向上につながるという考え方も出されていたように記憶しておりますが、その辺はどうでしょう。

（関電）そのとおりです。災害に対する安全性の向上という事に集中して考えますとそう云うことになりますが、悲しいかな、絶対という対策を講じることは出来ません。したがいまして、安全性の向上を目指して地中化するか、復旧作業のしやすさに鑑みて地上に残しておくかは相反する課題ともいえます。

（企画）なるほど、そこで送電線の多重化が図られているわけですね。

（関電）そうです。安全性を確保しながら、万が一の時の復旧にも迅速に対応できるという考え方です。
（企画）ありがとうございます。次に、今回の震災時における企業内外からの応援体制などに関するお話が伺えますか。
（関電）そうですね。３月末ごろまでは全国からの支援をいただいた。近畿で言えば当日のうちに全域から駆けつけてくれたが、悲しいかな土地勘がない。加えて被災地の営業所にもマンパワーに限界があるということで、初動時において応援部隊をうまく機能させる仕掛けに課題が残った。和歌山の㈱きんでんからは５２名が駆けつけてくれた。西宮営業所として、午前９：００には復旧班の立ち上げを終えて、被災状況調査を進めていたが、もともと完全な２４時間体制であったことも初動の良さに幸いしていると考えられます。
（企画）電力復旧に関する優先順位のようなものはあるのですか。
（関電）あります。大型病院への配電を最優先とします。今回でいえば、１７日に私自身が西宮市の笹生病院に入りました。笹生病院の復旧で思い出すのは、九州電力の「発電機車（500kw）」が来てくれた。中規模の事業所であれば、あれ一台で十分な配電が実現できる。１８日の夕方だったと思う。

（企画）発電機車ですか。
（関電）そう、発電機車です。あの時は全国から２４台の発電機車が入っています。
　早いところでは中電の発電機車が１７日の夕方には兵庫区に入って活動しています。
（企画）早いですね。阪神・淡路のような大災害時において応援部隊の存在を抜きにして復旧作業の進捗は図れないとは思うのですが、各電力会社規模での発電機車のような機材や応援部隊の派遣というのも取り決めのようなものがあるのですか。また、その為のスタートキーといいますか、どこかから包括的な指示が出る仕掛けになっているのですか。
（関電）今、お話に出てます「発電機車」に関していえば、全電力という全国組織が協議体としてありますので、そこからの指令に基づいて、周波数の違う区域（50khz と 60khz）を除く全電力会社が参加しております。
（関電）そうですね。応援部隊が派遣される場合には、やはり現地からの応援要請がまずありきという事になります。ただ、事故対策そのものは各電力会社においても均等にスキルを持っていますので万全の出動準備を終えたうえで、指令、要請を待っているという状況です。ほとんどの場合で要請される内容と準備を終えた応援の体制が一致するというのが培ってきたスキルの高さだと思います。
（企画）なるほど、凄いですね。では、その現地からの応援要請を全体的に取りまとめる部署というのはどこになりますか。
（関電）この度のような大きな災害になると、神戸営業所のネットワーク部門というところに情報は集中するようになっています。もう少し規模が小さく、管区内ということになると各営業所単位の設計部門で処理します。
（関電）そういう場合で在宅時間帯に発生した災害の場合には、住所地を所管する営業所に出動することになります。それぞれの登録が各住所地の営業所にもあり、対策チームとしてのスキルも備わっています。
（企画）何か、学ぶことばかりでお恥ずかしい限りですが、もう少し教えていただけますか。災害時の復旧作業のなかで他のインフラ部門との連携の必要性や仕掛

けなどに関するお話はございますでしょうか。

（関電）そうですね。連絡をとっているという意味で言うと私どもの電柱を敷設する場合の地下埋設物として中圧以上の高圧管の敷設場所などは事前に定期確認をとっています。そういう事前の確認や連携に工夫の余地は残っているかも知れませんが、いざ、作業に臨んでという段階ではチョッと無理ですね。

（企画）そうですか、分かりました。では、最後になりますが災害発生時に一番大切になされていることと、行政に対しまして何かご要望がございましたらお聞きしたいと思います。

（関電）はい。大切なことは特別なことをするのではなく、日頃からその時のためのスキルを高めておくということだと思います。災害時ではなく、むしろ平時においてマンパワーと資材を揃えておくことのほうが大切だと思います。スキルは個人としても大切だし、チームとしても大切になる訳ですから、いつ何時、どこに組み込まれても役に立つ水準にまで高めておく必要があります。

（関電）市役所への要望というわけではありませんが、最近、「鳥インフルエンザ」の関連業務でトランスにある鳥の巣を処理する必要があったので、環境部にうかがいました。鳥は益鳥で処分はできないということでいろいろ相談に伺ったのですが、お互いに初めての経験に近く戸惑いもありました。このように今後とも様々な事柄でお世話になると思いますので、お互いに頑張りましょうというところです。

（企画）ありがとうございます。最後の最後に、ご家庭で出来る電気まわりの災害対策を一言お願いします。

（関電）はい。今回のようなことがあれば必ず元（ブレーカー）を落とす。垂れ下がっている電線には絶対に触れない。このふたつです。大きな災害になるとガスが漏れてる場合などがありますのでチョッとした火花で引火する危険性もありますのでブレーカーは落としていただきたいことと、電線が垂れ下がるというのは滅多になく、ほとんどの場合は他の（電話やケーブル）ものですが、もしもの場合がありますので絶対に触れないようにくれぐれもご注意いただきたいと思います。

（企画）ありがとうございました。長いお時間があっという間に過ぎてしまうほどに中身の濃いお話をたくさんいただきました。市としても学ぶところが多く、大変有意義な取材になりました。これからもお世話になりますがよろしくお願い致します。本日は本当にありがとうございました。

芦屋市ＰＴＡ連絡協議会
会長 中井 和枝 様 ・ 副会長 山本 美佐栄 様・副会長 成田 直美 様
・馬引 幸代 様・村上 美佐枝 様
日時　平成１６年１２月１７日（金）午後１：００～２：４５
場所　市役所北館３階　第６会議室

（企画）お忙しいところ、お呼び立て致しまして恐縮です。
　本日は現在、芦屋市が取り組んでおります「震災復興１０年事業」の一環としまして震災当時のＰＴＡや子供たちの置かれた状況とか、その後の対応などにつきまして保護者の皆さん、あるいはＰＴＡとして感じたところや行政へのご意見などを貴重な教訓として記録し、今後に生かしていきたいと考えております。どのようなことでも結構ですので、お話しいただきますよう宜しくお願い致します。
　では、まず震災直後の状況からお聞きしたいと思います。
　震災は子供さん方にもショッキングな出来事で影響も大きかったのではなかろうかと思います。そういったところも含めまして恐れ入りますがよろしくお願い致します。
（ＰＴＡ連絡協議会（以下、「Ｐ協」という。））
　はい、うちには当時小学３年生と１年生、それから２歳半の子供が居ましたが、やはり一時期は１人ではトイレにも行けないといった影響がありました。

幸いに被災の程度は一部損壊で家人に怪我などの被害はありませんでした。
（Ｐ協）いろいろな意味で、情報がなかなか入らなかったですね。
　私の場合は主人が大阪に勤めておりましたが、大阪で見るテレビや聞く話の方がむしろ整理された情報として流れていて、ああ、そうなのか、という事があまりにも多かったように思います。
（企画）当時の子供たちの状況に対して、その後のフォローがどうなのかという部分でご意見がございましたらお聞きをしておきたいのですが、どうですか。
（Ｐ協）具体的なアンケート調査などが実施されたので、学校などは実態をつかんでいたと思うのですが・・。いつも思うのですが、アンケートは実施するけどその後の報告や対応が見えない。子供たちのことなので、問題があれば直ぐにでも対応しなければならないケースが多くあったように思うのですが、どうもそういうふうには考えられていなかったように思います。
（企画）そうですね。迅速な対応というか、臨機応変な取り扱いというのが行政の弱点の一つとも言えるかもしれません。本日はそういった事実を一つひとつ拾い

上げて、特に必要であった事柄なのに出来ていなかったことを記録し、今後の取り組みに生かしていくことも重要な役割だと考えています。

（Ｐ協）今さらという感じもしますし、多くの被災者の中には「触れられたくない」思い出として震災が横たわってる場合もあります。その時々に対策を講じておかないと意味がないようにも思えることが沢山あります。

（企画）そのとおりだと思います。反省すべきだと思いますが、もう一つ大切なことは、そういった失敗を二度と繰り返さないということだと思います。

おっしゃられるように、必要であり実施されなくてはいけない事業は多数あると思われます。それが他事業との兼ね合いや、全体でのバランス、あるいはマンパワーの割り振り、最近で言えば財政上の問題などで先送りにされる場合があります。

本日、何よりも大切なことは、それではいけないということを記録するとともに、万に一つ、もう一度同じ必要性に迫られた時に最優先事項として実施されるようにしておくことだと思います。

（Ｐ協）そうですね。子供たちの将来にもっと責任を持って取り組んで欲しいと思います。

（Ｐ協）私は当時というか、その日に２歳半の子供が急なひきつけを起こして西宮の病院に連れて行って、そこで被災しました。主人の実家が芦屋で、私の実家は新神戸駅の近くでしたが、当時のことは今だから言えますが、市によって対応が違い「非常に不公平」だなということを感じていました。色々な面で、本当に困っていた人に手をさし伸べられてはいなかったように思います。

（企画）色々な見方はありますが、一面そういうことを感じてしまう面もあったかもしれないですね。

例えば、避難所にも行かずに自宅で頑張っておられた方の手元には救援物資は届かない。あるいは、初期の段階ですと隣近所が励ましあってテント生活などをされてても避難所として認定されてなければ、後回しというか行政の手が伸ばされるまでに時間がかかった。その時、その時のプライオリティというか、行政のマンパワーにも限界があったために、そういう不公平感が存在したことは否定し切れません。その為の避難場所や、経路の確保、そして自主防災の組織作りなどが、今急がれています。

（Ｐ協）ただ、その時はそんなことを思う余裕もなく、現実をバネにして頑張ってきましたし、肥やしにしなければいけないと考えました。

（企画）ありがとうございます。私たちも出来たことと出来なかったことをこの１０年を一区切りとして総括、検証し次の有事に備えられるようにしていきたいと考えてこのような事業に取り組んでいます。先程のお話にもありましたように行政が出来なかったことを市民の皆さんは決してあきらめずに要望し続けていただきたいし、行政はそれに応えていくための知恵や工夫を皆さんと一緒に生み出していく必要があると思っています。

（Ｐ協）私の自宅は全壊でした。私自身も下敷きというか埋まっていたのですが、人ひとり分の隙間があったために九死に一生を得ました。

子供のことで言えば、当時１才２か月の娘がショックで歩けなくなったのを覚えています。その後高熱がでて、病院を探したのですが適わず、神戸の兄に頼んで遠方での避難生活が始まりました。

子供はその後も行動範囲が狭くなり、大変心配しました。

（企画）今回の震災を一番端的に表現されるような体験ですね。宮塚町あたりは２階建ての建物がそのまま平屋になってる建物があちらこちらにありました。大変

な経験をされておられますし、同時に先程も出ていました、自分で、あるいは親戚の力を借りて頑張られた典型の一つですね。

（Ｐ協）わたしは、震災の後で横浜から越してきました。知人の家が神戸にあるのである程度のことは聞いていました。まるで空襲にあったようだといい、行政の立ち上がりが遅いというお話しもお聞きしましたし、自衛隊の出動をいったん断ったというようなお話しもあったように記憶しています。外からの方が情報が処理できてしまうので、本当にもどかしく思いました。

（企画）そういう被災地に越してこられたのはいつ頃になりますか。

（Ｐ協）震災後１年経った頃です。芦屋に来た頃はまだ道路がひび割れていました。

小学校には震災後のケアに必要な担当の先生が配置されていたようにお聞きしましたが、有効に活用されていたのかどうか？

当時、文部省（現・文部科学省）から大きな予算が被災地に投入されたようにお聞きしましたが、どういう形で活かされたのかが未だに分からないままです。

（企画）復興担当教諭が配置されていました。先程からお話に出ているＰＴＳＤといいますか、震災後の子供たちの心のケアなどを中心によりいっそう丁寧な対応が必要とされていましたので、その為の担当教諭が配置されたと聞いています。

復興事業としてはご多分に漏れず、その後の配置は先細りしていきました。

（Ｐ協）小学校にカウンセリングの先生が配置されなくなっているようですが、やはり最近の児童を取り巻く環境などを考えますと逆行しているというか、どうして後退させてしまうのかと理解に苦しむ部分があります。

（企画）財政難を理由にする場合が多いかもしれませんが、お金がないということは、分かってるから、そのなかでどうするのかという事を追求してあげてください。教育に限らず福祉、防災、全ての行政分野にわたって、それを考えて実践する時代になっています。

ですから、決して遠慮されずにお金がないなかでも必要なことを是非主張していただくようにお願い致します。その代わりと言っては何ですが知恵や力も貸していただきたいと思います。

（Ｐ協）わたしは千葉から６年前に引っ越してきました。ただ、実家は神戸市の本庄にありましたので、大体の様子は聞いておりましたし、母は未だに当時の話しをします。当時は、空き地のいたるところに遺体が並べられていた風景を思い出すという話しなどを聞くと、あぁ、凄い経験をしたんだなということが、例え直接ではなくても感じることが出来ます。姉も芦屋市のシーサイドタウンに住んでいました。２４階なのでひどい揺れを経験してます。姉の子は未だに当時の怖さを引きずっているようにも聞いています。

（企画）実家は東灘区ですか。本庄地区となると相当な被害が出ていますし空き地に遺体が並べられている風景というのも頷けます。お姉さんもシーサイドの２４階となると窓から地面が見えたという伝説の揺れ方を経験されているわけですね。

（企画）こうしてお話を伺っていますと、それぞれのご親戚を含めた被災体験があり、決して他人事にはなっていないということに感激しましたし、その意味からもしっかりとした総括を行って今後に備えなければいけないという思いをさらに強めました。

せっかくの機会ですから、行政に対する要望などを、ここまでお話しいただいたこと以外にございましたらお聞きをしたいと思いますので、よろしくお願いします。

（Ｐ協）わたしは、震災を経験した強みを市としてもっと生かして欲しいと思います。良くも悪くもあの体験からいろいろな事を学んだわけですから、学んだことをその後の子供たちに対する教育面に生かしていただきたいと思います。生命の尊さや、人と人が助け合うことの素晴らしさなどは、震災を経験したからこそ、より一層大切にして教え育てることが出来るのではないかと思います。

（Ｐ協）復興担当教諭の配置なども、時間がたったから引き上げるというのではなく、そういう今必要な教育のために有効に活用されていく必要があるように思います。そういった先生方の配置についても財政難で悪くなっているということはありませんか。カウンセリングの先生もそうですが、今必要な人的な配置は是非今していただきたいと思います。

（Ｐ協）先生方の配置に関してですが、市内の小学校間でバランスは取れているのでしょうか。年齢構成（平均年齢）が極端に違うとか、男の先生と女の先生の数的なバランスとかはどうでしょう。昨今のような凶悪犯罪に子供たちが巻き込まれている状況を考えたら、特に男性の若い先生のそういった配置についても気になってきています。

（Ｐ協）同じ意味からも、幼稚園の自由園区に続いて小学校もそうなるのかということも気になります。

（企画）教諭の配置については基準を上回ることはあっても下回ることは今のところ決してないでしょうし、子供をとりまく犯罪対策は学校にとっても最重要案件ですから職員の配置についても相当慎重に考えられたものになっている筈です。校区の問題はそれが大きな流れではあるのでしょうが、はっきりしたことは分かりかねますので確認いたします。

今までのことよりも、これからのことでお話をし始めますと一気に出ますね。

さすがＰＴＡ協議会さんだと思いました。あと、時間も少なくなってきておりますが、Ｐ協さんと他の組織、例えば自治会さんとかコミスクさんとかが連携して防災訓練を行ったりという仕組みが地域には既にあるのでしょうか。

（Ｐ協）具体的には２年に一回、防災倉庫の資機材の点検と学校単位で地域を含め防災訓練を行っています。徐々にではありますが連携は取れつつあるように思います。

（企画）ありがとうございました。貴重なお時間をいただくなかで、震災時に児童が受けた影響などを教訓としてこれからの教育環境の改善へとつながるよう本日いただいたお話の中から、キッチリと課題を浮き彫りにして、今後に活かしていきたいと思います。具体的には総合計画の後期５ヵ年分をローリングする時期にありますのでそちらで活用していくようにいたします。今後ともよろしくお願い致します。その思いを申し上げて本日の懇談は終わりにしたいと思います。本当にありがとうございました。

国際ソロプチミスト芦屋
会長 江崎 由佳 様 ・宮本 陽子 様・森　房子 様
日時　平成１６年１２月１７日（金）午後３：１５～４：４５
場所　市役所北館３階　第６会議室

（企画）お忙しいところ、お越しいただきましてありがとうございます。また、このたびは貴重なご提案をいただき１．１７あしやフェニックス基金の礎を創っていただきました事に心より御礼申し上げます。

本日は現在、芦屋市が取り組んでおります「震災復興１０年事業」の一環といたしまして、国際ソロプチミスト芦屋さんのご活動や会員の皆さんの近況、あるいはこの間に取り組んでこられた事業についての苦労話や行政へのご意見などをお話いただき、これを貴重な教訓として記録しておきたいと考えております。限られた時間ではございますがよろしくお願い致します。

では、あらためまして「国際ソロプチミスト」のご紹介からお願いできますでしょうか。

（国際ソロプチミスト芦屋（以下「ＳＩ芦屋」という。））

国際ソロプチミストは歴史的に申し上げますと１９２１年に米国加州のオークランドで８０名の有識女性によって結成されました。日本では１９６０年、最初のクラブが東京に誕生しました。その後、千家の先々代の嘉代子様が提唱され、飛躍的に発展を遂げ各地にクラブができました。

特徴といたしましては、管理職、専門職に就く女性ばかりで構成されていることで、現在、全国で５４８クラブ、約1万５千人の会員がおります。ちなみに、世界規模では１２５か国9万５千人を有しまして、国連のＥＣＯＳＯＣの総合諮問資格を持つＮＧＯとしてＵＮＩＣＥＦ、WHO等の国連専門機関の活動も支援し、時には連携して活動します。

（企画）国連と連携して活動する立場を確立されておられることは、女性の地位を向上させていく立場から考えましても、このうえなく素晴らしいことですね。

（ＳＩ芦屋）女性や女児の地位を高めること以外にも、環境問題や教育問題、国際親善、そして青少年育成等々幅広い活動をとおした社会奉仕を目指しております。

（企画）そのような広範な活動のなかで、国際ソロプチミスト芦屋はどのような経過で誕生されたのでしょうか。

（ＳＩ芦屋）国際ソロプチミスト芦屋と阪神・淡路大震災とは切っても切れないご縁というか、結びつきがございます。

と、申しますのも、実は平成７年３月３日、新神戸オリエンタルホテルに於

いて「認証式」を予定して準備も着々と進み多くの姉妹クラブから祝福を受ける喜びに溢れておりましたところに、あの震災がございました。一時は放心状態といいますか色々な意味で大きな出来事でございました、あの震災は。

※国際ソロプチミストは４つの連盟で構成され、日本はアメリカ連盟に所属しています。日本では、北、東、日本中央、西、南の５つのリジョンがあり、ＳＩ芦屋は日本中央リジョンに属しております。国際ソロプチミストは同一レベルで活動できるように連携がとられていると共に、各クラブ独自の奉仕活動を地域社会、国内外で活動しております。

（企画）そうでしたか。不勉強で申し訳ございません。そうなりますと、その後のことも大変気になるのですが、それよりもそれ以前の芦屋にソロプチミストの拠点がなかったという事のほうに少なからずの驚きを覚えております。

（ＳＩ芦屋）ＳＩ芦屋はＳＩ神戸東を親クラブとして発足いたしますが、もともとは西宮も、尼崎も、そして芦屋もＳＩ神戸東のテリトリーとして活動を重ねてまいりました。そこに、１都市に１クラブとの考え方が確立され、西宮と尼崎に出来、その後芦屋にもクラブとしての認証をいただくことになりました。

（企画）わたしなどは、芦屋の特色の一つである自立された女性が多くいらっしゃる印象がありましたので、そう感じたのかもしれません。

（ＳＩ芦屋）芦屋にクラブはございませんでしたが芦屋在住の会員がＳＩ大阪、ＳＩ神戸、ＳＩ神戸東、ＳＩ六甲などに在籍して活動しておられた経過もございますので、そう感じられたかもしれません。

（企画）しかしながら、いよいよ「認証式」という矢先にあの震災という事実には運命的なものを感じますが、会員の皆様方にも物心に渡る影響がおありではなかったかと思います。どうでしょうか。

（ＳＩ芦屋）怪我をされた方とか目に見えるところでの被害はそうでもございませんでしたが、それぞれの方が事業に関わっておりましたので、事業によりましては、そちらへの影響が少なからずあったように思います。何れに致しましてもクライアントを含めて劇的な環境の変化が突如として起こったということでございますので、そちらの方に苦心なされた方もおられます。

（ＳＩ芦屋）わたしはジュエリーを扱っておりますが、幸いなことに震災の影響は少なかったと思います。ビルのオーナーも直ぐにメンテナンスをしてくださいましたので、むしろご心配をいただいた友人やお客様方が支援方々お買い物をしてくださったので助かりました。

（ＳＩ芦屋）わたしは主人が産婦人科医院を開業しておりますので、ミルクをつくる為のお水とか入院患者さんの食事の確保に苦心いたしました。お水は近くの酒屋さんで最後のペットボトルをレジで並んでいる見知らぬ人からお譲りいただいた時、とても嬉しかったことを覚えています。もちろん、

その一方でつらい思いも致しました。６か月前、当院で生まれたベビーがピアノの下敷きになったと父親が蒼白な顔で来院され、直ちに救命を施しましたが帰らぬ人となりました。毛布にくるんで抱いて帰られる後姿がとても痛ましく、今も忘れられません。

（ＳＩ芦屋）わたしの場合には、会社が大阪にありましたので事業への影響はほとんどございませんでした。山手町の自宅も大きな被害はございませんでしたが、何分、水が止まっていましたので困りましたが、その後の人の助け合いが心象風景として残っております。

ある方のご自宅に散水用の水道が別に敷設されてございまして、水が出ておりました。最初は皆さんバケツを持たれて並んでいたものですが、そのうち蛇口にホースがつきましたので、ずいぶん汲みやすくなりました。

そうこうしているうちに、次の日にはホースが横に延ばされて途中に穴をあけることで複数の場所で並んで水がいただけることになりました。さらに次の日には、誰ともなく柄杓が置かれたり、水を運んでくれる大学生が現れたりとドンドン良くなってまいりました。

思いますのは、人は本来的にやさしいということ。普段は照れがあったり、機会がなく出せないやさしさが、ああいうときには自然に出せる。そんな経験をさせていただきました。

（企画）教えられたこと、厳しい現実に涙したこと、気付かされること、まさに様々でございましたが、心身の傷、いまだ癒しきれずという面はまだまだ残っているように思います。そのような厳しい状況のなか、その後の「認証」にむけた取り組みなどがあるわけですね。

（ＳＩ芦屋）結局はちょうど１年後の平成８年３月１日に、８００名の姉妹クラブのご出席をいただいて、晴れて認証式を挙行する事が出来ました。
このとき、２３名の会員で「国際ソロプチミスト芦屋」が誕生しました。

（企画）いよいよ「認証」という年に震災があり、様々な苦労を乗り越えられて発足されたソロプチミストさんと、震災から１０年という節目の年にフェニックス基金の礎となるご寄付をいただくというご縁には人知を超えた運命的なものを感じております。今後の基金の拡充と、災害支援を中心とする社会貢献にむけてより一層努力いたしますことをお約束いたします。

（ＳＩ芦屋）わたしたちも何か運命的なものを感じております。何とかより良い形で社会に貢献できることと、その過程で素晴らしい人との出会いと繋がりがつくれますように期待いたしております。

（企画）ありがとうございます。基金へのご支援の他にも、子供たちの安全のための監視カメラ等、幅広く、あたたかいご支援をいただいていることをお聞きしております。ここで是非、行政に期待するところなどもご意見としてお聞きできましたら幸いと考えておりますので、よろしくお願い致します。

（ＳＩ芦屋）最近になって市にお金がないというお話をお聞きします。かと言って「ない」といいましても、どなたかから戴けるわけでもありませんので、新たな収入を増やす方法を考えられる必要がおありかと思います。例えば煙の出ない（ＩＴ系）産業の誘致でありますとか、外国企業のオーナーも芦屋には少な

からずお住みのようですし、ご相談されるのもよろしいかもしれません。

（ＳＩ芦屋）男女共同参画の審議会に出席しておりますが、市民のためのまちづくりという視点とお話している中身はよろしいのですが、どのように実行していくのかというプランが見えてきません。感じますのは、色々とお考えになられて計画もされますが、具体的な実効性はどうなのかということに少し疑問を感じております。そこらあたりのスキルをもう少し高められたほうがよろしいかと思います。

（ＳＩ芦屋）わたしは、子供たちが「小さな親切から大きな喜びを得ることができる」という人としての豊かさを学べるようにしてあげて欲しいと思います。

このたびＳＩ芦屋は、芦屋市内の小学校７校に（精道小学校は建て替えで除く）遠隔監視カメラを寄付させて頂く事になりました。これには、多くの人のご理解とご協力を得て、実現できる運びとなりました。このようにたくさんの人に見守られて、子供たちが心も安全で安心して学ぶことができる環境を提供してあげて欲しいですし、できれば幼稚園か小学校の低学年の頃からの情操教育としての心の豊かさを教えてあげて欲しいと思います。

震災以降の「心のケア」カウンセリングのお話を耳にしましたが、そういう人材を支援するためのメニューもソロプチミストにはございますので、是非、適任の方がおられればご推薦をいただくなど、少しでも子供たちに夢のある環境を創出していくための活動を続けていきたいと思います。

※日本中央リジョンの今期のテーマ
明るい未来を作りましょう！　―子どもに愛を・地球に緑を―

（企画）ありがとうございます。さりげなく、行動を起こされたソロプチミストさんの周囲で賛意を表される方や、ご協力を申し出られる方が増え、より大きな取り組みになっていく。人と人との関わりとして学ぶべきところが多くございます。市は、今後の指標として「協働と参画」を掲げておりますが、その前提として高い志操と行動が必要であるということが良くわかるお話でございました。

本日は、例会のあとの貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。

また、変わりゆく自治体経営上からも様々な局面でお世話になることと思います。

今後とも、おりに触れご意見などを頂戴できますことをお願い申し上げ、本日の懇談会を終わりとさせていただきます。

本当に、ありがとうございました。

芦屋市商工会
会長 小田 修造 様 ・副会長 池本　要 様 ・副会長 藤田 芳子 様
日時　平成１６年１２月２４日（金）午前１０：００～１１：４５
場所　芦屋市商工会館　２階会議室２

（企画）おはようございます。お忙しいところお時間をいただきまして恐縮です。
　本日は現在、芦屋市が取り組んでおります「震災復興１０年事業」の一環として震災当時の小田会長はじめ商工会としてのご活躍や、苦心談、あるいはその後の１０年のなかで取り組んでこられた活動などのお話を貴重な教訓として記録しまして、今後に生かしていきたいと考えております。震災当時にこだわらず、その後にお感じになった感想なども交えながらご自由にお話をいただけましたら幸いかと考えておりますのでよろしくお願い致します。
　では、まずはあの大震災、その瞬間に何を思い、何をされたかというところからお伺いしたいと思います。
　まずは、会長からお願い致します。
（商工会）多くの方がそうであるように、寝ていました。そこに突如としての大音響、ガチャン、ガチャンでしたか、ものすごい騒音とともに目が覚めた。全くの闇の中で何が起こったのかが分からなかったという一瞬の間があって、その次の瞬間に「これは地震だ」と分かった。当時は竹園町に仮住まいをしていたが、私は１階で、２階には女房が寝ていた。無事を確認するや、外を見るとはるか先まで見渡せてしまう。これは、全滅だと思った。

　向かいの家には、一人暮らしのおじいちゃんが・・。
　１軒おいた隣の家の前では子供を亡くしたお母さんのなんともいえない泣き声が‥‥。
　隣の家では土蔵が崩れて生き埋めになった娘さんがおられたようだが‥‥。
　３日後に自衛隊が来て掘り起こしてくれたが‥‥。
　実際にあの時は、宮川が見えた。宮川まで見渡せるほどに家が潰れていた。
　戦争で家が焼け、娘が結婚した年の５月にも家が全焼した。いろいろな事を経験してきたつもりだったが、あの出来事は特別だった。あの辺りは古い家が多かった事もあったのだろうが、正直言って足が震えた。
　徐々に我に返り始めて、ふいに子供等のことが気になり始めた。息子は大桝町に住んでいたが、車が使えそうになかったので自転車で行った。目を疑ったが、付近一帯は壊滅状態。誰もいなかった。しばらくして、精道小学校へ避難していることが分かった。おばあちゃんの家が潰れてたが、倒れてきた箪笥と仏壇の隙間で何とか助かった。まさに九死に一生といったところだった。1歳半の孫は無事だった。
　娘は大東町にいたが、こっちは家も大丈夫だった。
　ここまでは、長いようだが一瞬の出来事。ようやく従業員の安否確認に奔走したが、なかなか所在が掴めなかった。当然のように店の方はグチャグチャ、

ラポルテに新装した店の方もカウンターは倒れて、天井に穴が開き、どうしようもない状態だった。摂津本山の店もダメ。従業員の所在もなかなか把握できないなか、あせった。

最終的に全員の安否が確認できたのは一ヵ月後で、おひとりの従業員が亡くなっておられた。それも、激震が襲ったその瞬間に階段にいたためにその階段が落ちてなくなった。

ほんの 1～2 分前後にズレてればご生存であったかも知れない。無常だ。

潮見町の店は液状化が激しく、心配したが屋根の軽さが幸いして無事に済んだ。浜風は連棟の端が無事で、真中付近は液状化の影響を受けた。何が災いして、何が幸いするかわからない。

自宅は壊れなかったが住める状態ではなかったので、しばらくは店の 2 階の 6 畳一間に息子家族と 5 人で住んだ。この頃の一日は水汲みから始まった。

商工会はというと、会館は大丈夫だったが、会員が被害を受けていたので商工会としての活動は実質不可能に近かった。特に、当時の会長宅が潰れて別のマンションに引っ越していたような状況で、会長を尋ねると、「後の事は、お前に任す。」と言われて、そりゃ大変だった。こっちも被災しているので、水汲みから始まる午前中は店や従業員のことをやって、午後からは商工会館に詰めた。

国・県の対応は全てやった。走り回るものだから、時として連絡が取れなくなる。ポケットベルはあったが電話が使えないこともあって、「携帯電話を持ってくれ」、と言うことになった。よっしゃ、分かったと購入したら自腹だと言われた。（笑い）当時は、まだまだ７～８万円はしていた。

そうこうしている間に、全国の商工会からの支援が始まった。

当時は支援する側にもノウハウがなく、現地の様子もわからない中で、救援物資は何が必要ですか？の問い合わせが多かったが、私は「暖かいもの」を頼んだ。

これが当時の風物詩のひとつである「炊き出し」になった。

商工会としては、会として目立つことは少なかったかも知れないが、この会館からあらゆる場所に「炊き出し」の手配をした。いわゆる対策本部的な機能を果たした。「炊き出し」は当時の厳しい寒さのなかでは温もりのある取り組みだったと思っているし、その後の被災地でのスタンダードにもなっているように思う。

（企画）そのとおりですね。その後の被災地では、いち早く「炊き出し」部隊が編成されて「食」と「人の温かさ」が同時に届けられていますね。それにしても、親として、雇用主として、商工会を代表されてのひとり三役は、さぞ大変だったと思いやられます。本当にありがとうございました。では、つぎに池本副会長さんお願いいたします。

（商工会）わたしは、ガス爆発だと思い胆が冷えた。3 階に寝ていた母親が箪笥の下敷きになり脊髄骨折したが、命に別状はなく、当時の状況を考えたら幸いといわないといけない。

他に、伊勢町に息子と呉川町に娘がいたが、幸いに怪我はなかっ

た。玄関は歪んでいたので、2階の窓から外に飛び降りた。母親は大阪の病院に数ヶ月間の入院生活を余儀なくされた。3～4か月間はガレージの車の中で生活したが、行政の用意した食料には助けられたと思う。水は井戸があったが途中で壊れて直す羽目になったりで、少し苦労したかな。いずれにしても、けが人がひとりだけで助かりました。

（企画）ガレージで数ヶ月は大変でしたでしょう。新潟では車の中での生活が痛ましい新たな災害を引き寄せたりしていますし、ご無事で何よりでした。では、続きまして、藤田副会長にお話を伺います。

（商工会）とても綺麗な空でした。ほんのりとウロコ雲が出ているような、そんな空を目にしながら西宮市へ仕入れに行く途中でした。と、突然の稲光がしたと思ったら「ドーン」と来て、後はあたり一面真っ暗闇になった。何が起こったのかと後ろを見ると、私たちが今通った橋が落ちて、何も無くなっていた。当時の映像でご存知の橋の落下地点、その３台前に私と主人の車がいた。

それでも主人は西宮に行った。仕入れがあるからと。

結局、その段階では何が起こったのかが良く飲み込めないままにいつもどおりの仕入れに向かった。それも、停電で動かなくなった踏切なんかは手で上げながら進みましたから、今から思えば何かおかしかったのでしょうね。日常とかけ離れすぎた出来事をすんなり受け入れられないと言うか、なんと言うか、いつもどおりに西宮では「もやし」を仕入れました。

帰りは、いつもの道が通れないので上から帰ろうと言うことになって山側を走りました。途中で壊れた自宅から若い夫婦が着の身着のままで家の外に飛び出して困っていたので、何か要るものがあるかとごく普通に聞いてみたら、「下駄が欲しい」と言う。履物が欲しかったのだろうが、何から何まで何かおかしい。

山手を走ると、視界が開けてあちこちで「火」が見えた。これは、大変。とも思いかけたが、主人は仕入れを続けた。

途中で４３号線に降りたが通れない。どこから水が出たのか、道路も冠水してたけど、それでも走って仕入れのために東部市場を目指す。

市場付近に来て、ようやく事態が飲み込めたというか、市場は騒然としてて、当然のことながら仕入れどころではない。そこで、ようやく家に連絡。自分の店が気になり始めた。

急ぐ気持ちと競争するように店に戻ったら、幸いに店は無事、軽鉄構造がよかったのか、ほとんど被害はありませんでした。まぁ、その後徐々にダメになりましたけど・・・、液状化で土地が傾きましたから。

店に戻って、まず考えたのは「市場」をどうするかと言うこと。

当時の喫急の課題は「水」と「食」と「商」のこと。早速、浜センターに泥棒が入ったと聞いて「自警団」を作って対処した。みんなが、市場最優先で頑張った。あの時ほど、日常的な地域とのつながりがいかに大切かを実感することが出来たことはない。

（企画）なるほど、仕入れの途中にあの地震ですか、凄い体験をされたのですね。そ

れと、お店に戻られてからの地域との一体感がお話を聞いていてビンビン伝わってきました。お商売をされていると言うことは、すなわち地域と結びついていることが前提になるという事なのでしょうが、そういう意味から、ここ 10 年の人の流れの変化でありますとか、行政への注文とか、後はフリートークでお願い致します。

（商工会）一口で言うと、芦屋の市民は芦屋で買い物をしなくなりましたね。大きな店舗に車で走って少し安いからといって大量に買い入れてくる。足代と余分な買い物であまり変わらない出費になってるんですがね。それと、そうすることで何よりも地域のコミュニティを大切にしなくなった。もう一度同じような災害に見舞われたときにもう一度助け合えるのかと不安になる。

（商工会）私の印象に残ってるのは、自宅の屋根を直した時に業者から聞いた話だが、業者は関東から来てて、奥尻の時にも現地に入った経験があって、奥尻では義援金で立派な家が立ったという話。

（企画）義援金の多寡については当時もよく話題になりましたが、奥尻や雲仙とは比較にならないほど多額の義援金が阪神・淡路には寄せられました。寄せられた善意が仮にお金ではかれるのであれば、阪神・淡路は間違いなく一番です。ただ、被災者の数も桁違いであったために、義援金を公平に取り扱った結果、そういった他の災害とは桁の違う金額になってしまいました。

　義援金以外にも、「住」への支援と「営業」への支援にバランスを欠いているという批判もあったように思いますが、そこら辺りを商工会としてはどうお感じになられたでしょう。

（商工会）特定の個人のことを言うわけではないが、バランスは悪かった。アパートに住んでいる人が被災すると、敷金が帰ってきて、仮設住宅に入って、南芦屋浜の災害公営住宅に入った。しかも、家賃は破格の安さだ。それに引換え、商店主は未だに抱えきれないほどの借金を抱えて立ち直れない人が多い。商店に限らず頑張った人ほど報われなかったような後味の悪さがあるのも事実だ。

（商工会）商店を止めざるを得なかった人。今もやめようと思っている人がいる。でも、やめたら食べていけない。それだけで頑張っている。夢がない。

（企画）頑張っている人が・・・、と言う話は胸に突き刺さります。当時の被災地全体の余力のなさと、「衣食住」というように、まずは生活の基盤からと言う感覚で「衣食」の次に、「住」の復興を目指したのではなかったかと思います。

　ただ、今回の新潟のように「職住一体」の被災地ではそうは行かないと思いますし、阪神・淡路でのそういった反省点の一つひとつが活かされなければならないと思います。

（商工会）私も県の戦略会議で知事に言ったが、「人」をもっともっと大切にせなあかん。それも、昔からその地域に住んでいる人を大切にする必要がある。戦後、地震後と人が変った。入れ替わったし、変化もした。地震の時にみんなが助け合ったあのコミュニケーションが今は既に減り始めている。残ったと思えるのは当時の３／１０程ではないか。人が入れ替わって、相乗的に人が変る。あと７／１０は今のままではダメ、何とか工夫して人情の感じられるまちにしていかないと助け合えなくなる。それでも、何か催しがあるときには「寄付」だけは頼みにくる。こっちも世話になっていると思うから応じるけど、それでエエのかな。

　当たり前やけど、昔は借金してでも税金を払った。今の実態としては、その借金返すのが精一杯になっている商店も多いと思うけどな。

　震災復興住宅や特定優良賃貸住宅に対する手厚い保護にも疑問を感じる時が

ある。行政は、全体のバランスをもっとよく見て、色々な制度を実施する必要があるのと違うかな。

（商工会）他の商工会と話していても、共通する問題だ。都市部の商工会のそれが弱点になっている。その点は行政の弱点にもなる訳やから、そこを補い合えたら良いかと思う。

（商工会）震災後に沢山の綺麗な公園が出来、災害時の避難場所に使えるという話はありますが、地域の皆さんから聞こえてくる話は行政が造りっぱなしにして、

後の管理だけを押し付けてくるという話しです。何故、そうなるかと言うとやはりコミュニケーション不足だし、有効に活用されていないからだと思います。

例えば、各公園を使っての夜間の避難訓練を実施するとかすればその公園の必要性がわかったり、当然ながら災害時に役に立ったりするのではないでしょうか。公園を造りましたから、避難場所に使ってください。普段の管理はお願いしますでは、工夫がなさ過ぎます。

（企画）ありがとうございます。現場で必要なことを仕事としてやっている程度では、やはり足りない所が多く残ると言うことが良くわかります。必要だから造った。ならば本当に必要だと思ってもらえるように努めなければなりません。あるいは、もっと「人」を大切にする話、１０年目に始める話ではありませんね。
経験を今後に生かすためにも大切な教訓として実践されていなければなりません。ハッキリ記録して取り組めるようにしておきます。

時間的に、最後の最後に、震災から１０年、あるいは長引く不況、そして少年犯罪や自然災害が多発するなか、商工会として重点的に取り組まれていること、あるいは人生の先輩として若い世代に一言ございましたら、お聞きをしておきたいと思います。

（商工会）こだわりというよりも、当然のこととして、市と商工会はこれからも力を合わせて発展していく必要があると思っています。その為の人のつながりも大切だと思いますし、もっとお互いに意見が言い合えるような体制も必要だと思っています。若い人には一言。特に最近の若い親は理解しがたい。その点、芦屋市には良い文化があるからある意味大切にして発展させて欲しい。芦屋市の保育所は良い。先生方には心から感謝している。特に私たちのように商店をやってると保育所で行われてる子育てには敏感になるが、芦屋の保育所は最高だ。

子育てのわからん親は保育所の先生に聞きにいったらエエと思う。そして何よりも家庭を大切にできる親になって、次に地域の中で暮らしていくことの意味がわかったらエエ。そうやって人が育っていかんと悪くなる一方だ。行政は是非とも子育てと言うか子供にもっと金を使うべきだと思う。

（商工会）商工会の会員が年々減っている。商売することに魅力がなくなっているのだと思うが市にとっても大きな問題ではないかな。私たちは会員を増やすことにこだわりを持ちたいし、行政もそのことに危機感をもって頑張ってほしい。

（商工会）例えば、病院は頼りになるドクターをはじめ信頼されなくては患者さんは集まりません。商売もそうですし、行政もそうだと思います。私たちは市場を、商店を一番大切にしてきました。そうすることで地域のコミュニティが活性化するという信念を持っていますから。どちらかというと家庭は二の次です。

そういうこだわりを持って、これからも頑張りますし商売人同士のつながりももっともっと強くしていく必要があります。若い人たちには、もっと自分から参加する意識を持って地域での信頼を勝ち取って欲しいと思います。災害があったときにどれだけスムーズに対応できるかと言うと心細いです。高齢化が進み、参加する若者もいないでは、やはり助け合えないと思います。顔すら知らない人同士でいるよりは、顔を知っているもの同士であるべきです。やはり、こだわりますね、日常的な地域での交流に。

（企画）ありがとうございました。その為にも市場の活性化は必要ですね。市場や商店には品物を買いにいくだけではありません。そこでの人の交流というか情報交換みたいなものが底になって地域のコミュニティとか文化みたいなものが生まれるのですね。そこで得た情報がもとになって子育ての悩みの一つや二つは解決するかも知れません。

本日は、時間がいくらあっても足りないぐらいに、いろいろな事を教えていただきました。貴重なお時間をいただいておりますので本日は、是非、またの機会にお話を聞かせていただくことをお願い申し上げまして終わりにしたいと思います。本当にありがとうございました。

大阪ガス株式会社　導管事業部　兵庫導管部計画チーム
マネジャー 村上　敬 様・チーフ 辻　正治 様
日時　平成１６年１２月２８日（金）午前１０：００～１１：３０
場所　神戸市中央区港島中町　大阪ガス（株）兵庫導管部会議室

（企画）お忙しいところ、会社にまで押しかけてしまいまして恐縮です。また、平素から市の防災会議ではお世話になりありがとうございます。
　本日は現在、芦屋市が取り組んでおります「震災復興１０年事業」の一環として震災当時の大阪ガスさんのインフラ復旧に関するご活躍や、その後の活動、社員の皆さんの被災状況、あるいはこの間に取り組んでこられた重点事業などについての苦労話や行政へのご意見などのお話を貴重な教訓として残し、今後に活かしていきたいと考えておりますので、どのようなことでも結構ですので、１時間半程度のお付き合いをよろしくお願い致します。
　では、まずは始めにこちらの事業所の歴史と震災直後の状況からお聞きしたいと思います。

（大阪ガス（以下、「大ｶﾞｽ」という。））
　当事業所の開設は平成６年１１月ですから、開設間もなく震災があったということになります。担当エリアとしましては西の姫路市や太子町から、東は尼崎市・伊丹市の一部・川西市・猪名川町・豊能町までと、北部は三木市・三田市・東条町・社町・滝野町までです。震災での社員の被災状況に関しましては、幸いなことに社員の死亡者はありませんでした。

（企画）犠牲者がなく、大きな被害がなかったというのは何よりでございました。その他、社屋の被害状況でありますとか、当日の参集状況はどのようなものでしたでしょうか。

（大ｶﾞｽ）供給区域内において、震度５以上の地震が確認された場合には、社員全員が自動出社することになっておりますので、そのとおりに対応いたしました。最初の作業は、施設関係の被災状況調査と情報収集でした。

（企画）もともと、２４時間体制をとっておられることと、日常的な事故対策マニュアルがあることからも初動から万全の体制といったところですね。自動出社は、それぞれお勤め先に出社されることになるのですか。

（大ｶﾞｽ）保安拠点として、保安基地が設けてありまして、即時性を高めるために予め指定された要員は、指定されたルートを経て指定された場所（保安基地）に出社することになっています。

（企画）ガス事業の場合に、あのような大きな災害が発生しますとライフラインの確保と安全性の確保という両方の緊急性が求められると思うのですが、その辺りの見極めが難しいのではないでしょうか。

（大ｶﾞｽ）確かにそれはあります。今回の場合には

二次災害を防ぐことを最優先とし被災状況の確認に合わせて順次停止を行いました。

結果として阪神間を中心とする被災地全域における停止が完了しましたのが２１：００で、供給停止戸数は、約８５７、４００戸でした。

（企画）ありがとうございました。あの状況下で二次災害的な被害が発生していれば、まさしくパニックというか、混乱は避けられなかったと思います。

（大ｶﾞｽ）当時は、全供給エリアを５５ブロックに分割しており、被害状況に応じて、供給を停止するシステムを確立していましたが、ブロックが大規模であるため、被害のないところを停止するわけにはいきませんし、一旦停止すると開栓時には一戸宛ずつすべてのお客様を回る必要が発生しますので、それなりの時間もかかります。大丈夫であった地域のお客様にもそれ相応のご迷惑をおかけすることに繋がります。

（企画）なるほど、先程の安全性と利便性のバランスですね。そこら辺りは今回の震災を経験された大阪ガスさんとして何らかの改善を加えられたポイントということになるのでしょうか。

（大ｶﾞｽ）はい。現在は全域を１２６ブロックに細分化して管理できるようにしておりますので、被害が集中している地区に限定して供給停止が可能なシステムに更新しております。

それ以外の部分もご紹介しておきますと、震災前は３４箇所に設置していました地震計を２３７箇所に増やしております。また、ガス整圧器には、感震遮断装置を設置しておりまして、６０カイン以上を計測しますと自動遮断いたします。さらに、各お客さまが設置しておりますガスメーターには２００ガル超（震度５相当）でガスを遮断するマイコンメーターの設置を推進しており、この設置率が９９％を超えています。

（企画）何か、背筋がゾクッとするような対応状況ですね。如何にも、阪神・淡路大震災の教訓がその後のガス事業に生かされているというか、より安全性を高めるための教材になっているというか。まだまだ、行政の対応とは比すべくもないぐらいの危機管理意識の違いを感じざるを得ません。

（大ｶﾞｽ）平成８年の１月に「地震対策５カ年計画」を作りました。その中で、今申し上げたようなさらに災害に強いガス事業のあり方を明示し、平成１２年の３月ですから１１年度ですね。４ヵ年でやり終えています。

（企画）ガス事業の場合は、供給設備というか、パイプそのものが地下埋設物ということになりますが、復旧作業やその後の更新整備をなさる上での困難性などは如何でしたでしょうか。

（大ｶﾞｽ）ガスの製造設備・主要供給設備には被害はありませんでした。トラブルが発生しましたのは、道路に亀裂、段差が発生した個所で比較的古い「ネジ継ぎ手」が使用されていたところに集中していました。現在は、さらに耐震性の高い（当時被害の出なかった）ポリエチレン管への更新整備を進めております。

（企画）重ね重ね、頭の下がる思いです。日常的なリスク管理がその時の対応を決めてしまうということをひしひしと感じております。しかしながら、当時は災害の規模が大きいこともあって、その復旧作業は人的な面をはじめ相当困難を極められたのではないでしょうか。

（大ｶﾞｽ）災害の規模という意味からいうと、そのとおりです。私どもも全国のガス事業者様から総勢で約３、７００名もの応援をいただき、大阪ガスグループの約６、０００名を合わせた約９、７００名で当時の困難な状況を乗り越えてきました。応援に関しては震災のあった翌朝には内容を決したうえで協会に対して応援派遣要請を行ないました。

その結果、その日の夕刻には続々と応援部隊が到着してくれました。このときには、その後の課題にもなります「大きな空地」の存在が不可欠であることを痛感しております。当社は、今津（西宮市）にグランドを保有しておりますので、とりあえずは支援基地として用いることが出来ましたが、以降、復旧が本格化するにつれてやはり手狭になりました。

以後の備えとしましては、ああいう緊急対応時には学校施設や公共空地を使用できるようにリストアップを済ませております。結果として、このように全国から多くの支援がいただけたおかげで４月の１１日には復旧宣言をお出しすることが出来ました。

（企画）ありがとうございました。大阪ガスさんだけではなく全国のガス関連会社間にも即時対応できるスキルが備わっているということがよくわかるお話でした。

このたびの新潟県中越地震などへの対応は、逆に大阪ガスさんが応援に駆けつけたということになるのでしょうか。

（大ｶﾞｽ）その体制は即刻立ち上げました。今回の新潟の場合は完全にスタンバイの状態を作っておくと同時に、先遣隊（調査隊）を新潟に派遣しました。

（企画）なるほど、他都市に大規模な災害が発生した時にも防災ネットワーク的なものが瞬時に、かつ機能的に働いていることがよくわかりました。

では、最後になりますが、現在なお重点的に取り組んでおられることや行政や各ご家庭での注意事項など、災害にまつわる何事でも結構ですので一言ずつお願い致します。

（大ｶﾞｽ）はい。当時を思い返しますと、電話という通信手段が一時期用をなさなくなりましたので、独自の通信ルートを持っておく必要性から無線を二重化して有効に活用できるようにしました。

事故対策や災害対策にこれで十分ということは決してないと思いますので、これからも事前にできる事はもれなくやっていきたいと考えています。ご家庭での留意事項につきましてはホームページやＣＭベースでもっともっと浸透させていきたいと思います。

今、防災に関する案件として最高レベルになっているのは「南海・東南海地震」ですから、津波被害などを想定しての訓練を実施し、一人ひとりのスキルを高めていきたいと考えています。

（企画）どうも、ありがとうございました。本日の大阪ガスさんや過日お伺いしました関西電力さんを取材させていただきますと、この１０年間の値打ちといいますか過ごし方に一種の凄みを感じます。災害を乗り越えることにより、多くの問題が課題化され、それをクリアして行く過程で、それぞれのフェーズが検証されつつ強化されるという好循環を導いておられるのがヒシヒシと伝わってきます。そういう企業のご努力のうえに安全で安心してくらせる日常があるのだということに感謝もしますし、行政の企画・実行力にまだまだ努力の余地が多く残っているという認識を新たにしまして、本日は終わりとしたいと思います。

長時間にわたりまして、ご協力ありがとうございました。また、今後とものご指導、ご協力をよろしくお願い致します。

芦屋市　水道部
部長 林 一夫 ・次長 川崎 正年 ・工務課長 濱崎 幸一
計画担当課長 山岸　悟 ・施設担当主査 山下 徳正
日時　平成１７年1月7日（金）午後１：００～３：００
場所　市役所北館４階　第８会議室

（企画）年初のお忙しいところ恐縮です。

本日は現在、市を挙げて取り組んでおります「震災復興１０年事業」の一環として震災当時の水道部の復旧に関するご活躍や、職員の皆さんの被災状況、あるいはこの間に取り組んでこられた重点事業などについての苦労話などのお話を貴重な教訓として残し、今後に活かしていきたいと考えておりますので、どのようなことでも結構ですので、１時間半程度のお付き合いをよろしくお願い致します。

私たちが、大切だと考えておりますのは当時の報道や記録集で残された数値的なものより、見えないところで頑張ってきた、支えてきた実態のようなものを掘り起こすことだと思っています。こういった部分は震災から１０年という節目の年にキッチリ記録しておかないと本当に風化するのではないかという危機感もあります。そういった観点から本日はお付き合いをいただきますようにお願い致します。

では、始めに震災当日の状況からお伺いします。

（水道）私は当時、名谷に住んでおりましたが家族を含む家のほうに大きな被害はなく、何とか出勤することが出来ました。覚えているのは、長田が真っ赤に燃えていたこと。地下鉄が動いていなかったこと。須磨パティオのガラスが割れて素通しになっていたこと。上空をヘリが飛んでいたこと。そういう風景の中に、これは「大変なことになっている」と冷静に思う自分がいました。地下鉄が動いてなかったので、とりあえずもう一度自宅に戻って家族に怪我のないこと。水を確保すること。親戚の安否。そして自宅周辺の被災状況とけが人の有無などを確認し直しました。

出勤は車でした。当分は帰れないだろうと漠然と思いつつ１週間分の着替えとおにぎりを持って芦屋に向かいました。

まだ、山麓バイパスが通れて山周りで芦屋を目指し、12：00頃には事務所に入ることが出来ました。

当時の職員数である４０名のうちの１９名が初動に参加できていたと記録されていますが、当時の水道部の何よりの強みはたたき上げの水道職員が居たという事だと、今も思っています。

既に、亡くなられたK氏が応急給水の指揮をとっておられたが、水道のことから人心まで、全てを掌握されている人の凄みを感じたのを覚えています。

その後、職員は応急給水に集中することになりますが、当時の芦屋市には給

水車両が１台もなく、たった１ｔのタンクの使いまわしで給水作業に従事しました。そのうち、報道で「水が出ない」,「水に困る」などのアナウンスがされたために水を供給する手段としてのポリタンクの確保に奔走することになりました。

　疲れを感じる暇もないぐらいに動きまわりました。職員も２３日には全員が出揃ったと記録されていますが、思えば長く厳しい日々の始まりだったと思います。

（企画）なるほど、全くという訳ではないでしょうが、ご家族に被害が出なかったというのは何よりでした。それと、水道事業に精通された方の存在が大きかったというお話は、いい意味でも悪い意味でも考えさせられる何らかの啓示のような気がいたします。そういった職員の存在の有無、あるいはそれ以外にも初動期に関して思うところがある方は続けてお話し願います。

（水道）私は、当時本山南町に住んでおりました。住んでいたマンションは全壊、付近は壊滅状態で、思うようには出動できませんでした。ポイントとしては近所で被災した犠牲者の方が多数おられたこと、被災した親や小さい子供を放って行くのかということの２つだったが、地域にあって地域で暮らしているひとりの人間として、あるいは人の親、人の子としてまず為すべきことと、公務員として為すべきことの葛藤の中でもがいていたような気がします。それでも結局は大阪の親戚に後事を託して２日目の夕方には出勤しましたが、何かすっきりしない所を残したままになりました。一旦、顔を出すと当分帰れなくなるのはわかってましたから、その状態をつくってから後顧に憂いなく出動するというのが本来だとも思います。当時、芦屋市にも肉親を無くしたり、怪我をされた方を後回しにして役所で頑張っておられた方も居られましたし、それはそれで素晴らしい事なのかも知れませんが内心はどうでしょうか。そういう意味で私は、横浜市のマニュアルにあるように、①家族の安否を確認する。②地元の救援にまわる。③出動。というのが適切だと考え、芦屋市もああいうマニュアルにすべきだと思っています。

（企画）同感です。その点に関しては、未だに様々な思いが交錯しているように、決して整理されたとは言い難い状況だと思います。災害の規模や、程度、広域性や緊急度などにもよるのでしょうが、基本的な取り組みの順序としてはそうあるべきだと思います。

※ちなみに、芦屋市の初動マニュアルによりますと、
　勤務時間外に発生した災害により自宅から出動する場合には、①家族の安否確認、②自宅及び周辺の状況を確認し、地域の安全確保に努めること。③緊急出動、となっています。

（水道）当時も、参集が早い、遅いでとやかく言う傾向があったようですが、そうではなく、それぞれの職員がおかれた状況に応じた取り扱いの「整理」が必要だと思いました。

（企画）そうですね。色々な意味から訓練されてスキルを身に付けたうえで、職員ひとり一人が自律することができる環境整備が必要であるということですね。

（水道）水道部では危機管理マニュアルの整備を進めています。本庁というか芦屋市全体分は全体分で必要だと思いますが、水道がライフラインであることからも水道独自のマニュアルが必要だろうという考え方に基づいています。先程も申し上げたように、当時の水道部には業務に精通した職員の存在がありましたが、今はどうか、そして今後はさらにわからないという状況の中で、緊急対応のあり方を体系的に整理したマニュアルの整備は不可欠だろうと思っています。

（企画）今回、同様の取材で関西電力さんや大阪ガスさんに聞き取りをしましたが、双方ともにマニュアルは存在しませんでした。というか、あるのでしょうが社員の皆さんはそれを意識外におけるぐらいに訓練を積まれているということが良くわかりました。日常的なスキル、要するに基本的な能力の中に危機管理が含まれているというか、インフラに関わる限りは当然のこととして、そういった特殊業務が特殊なことではなく日々の業務に埋め込まれているという感覚です。

（水道）当時は、実務経験者が多数いたので、それに近い状況もあったかも知れないし、その能力を中心に全体が集中して復旧作業にあたれたが、今後はそうならない。マニュアルの整備は絶対に必要だと思う。

（企画）マニュアルの整備と訓練が必要ということですね。

（水道）少し意味は違いますが、当時の大変な状況から考えると「報われない」というのも正直な感想として残っています。当時、私たちは一般職員で頑張れば頑張るほどに超勤というか、お金の面ではそれなりに報われましたが、管理職の皆さんにはそれもない。応分に報われていく仕組みみたいなものがないと次はしんどいかも知れませんね。

（企画）なるほど、その点に関しては他の皆さんも同じような感覚をお持ちですか。

（水道）うーん、難しいけどある程度はありますね。一番危機的な状況に全体が奮闘しているうちはまだ良かったけど、一定、混乱した状況が落ち着き始めた頃、ちょうど１年ぐらいたった頃に復旧・復興事業が始まった。その頃になると、職場毎とか、職種毎に温度差が出来はじめたという気はします。報われないというか、平成８年、９年と年を追うごとにしんどさが増してきたというのは事実としてありましたので、「報われない状況」がわかってしまった今となっては、次はしんどいかも知れないというのは正直なところ少しずつあるかも知れませんね。

（企画）確かに「報われる」という言葉をひととおりの意味に理解してしまうと、おっしゃるようにあの状況下での職務を理解するのは難しいかも知れませんね。

ところで、このたびの台風被害や新潟での震災にいち早く対応されたのが水道部だとお聞きしておりますが、今回の派遣や当時にいただいた全国からのご支援などにまつわるお話を少しお願い致します。

（水道）新潟へは台風被害の時に行った。震災経験者が年々減っていく本市にあっては、ああいう経験は進んですべきだと言う主張をしたが、なかなか受け入れられない。

（水道）新潟は、当時の状況で言うと２日目には既に来てくれていました。もちろん最初は点検部隊でしたが、素早い対応でした。

当時、私たちはズッと続けている応急給水と復旧を部隊として分けることを進言していました。確か、３日目を迎えて応急給水をいくら全力で続けていても、水道施設の復旧が為されない限りは焼け石に水というか、切りがないので、一刻も早く復旧作業に人を割くように進言しました。そこで、人的な体制をどう組み立てるのかという話になって、日水協（日本水道協会）に手を挙げて応援を頼めと、進言しました。そこからの応援体制や規模、内容に関してましては記録集の 47 ﾍﾟｰｼﾞに詳細が記載されているので参考にして欲しいと思います。

（企画）そうですね、応援の人数や、支援していただいた業務内容に関しては記録集を見れば一目瞭然ということですね。そのなかで支援を受ける場合に必要なことや、逆にこちらが応援に伺った場合に大切な事などはございますか。

（水道）来てもらう場合には、土地（資機材置き場）と、指令場所と、宿泊場所が必要になります。当時は、管財と話して芦屋温泉などを資材置き場に提供してもらったりしたが、いつもそう出来るとは限らないので、事前に用意しておく必要があります。それ以外にも、建設業者や配管工事業者等々、いざという時のための応援協定を結んではいるものの、応援してもらえるだけの関係を平素から構築しておく必要があると思います。

こちらが行く場合には、やはり年々経験者が減っていくので、ここでの経験を活かせるようにキッチリしたマニュアルを整備しておく必要があると思います。

（水道）都市部は、日々便利に考えて整備が進んでいますので、災害などで破壊されると非常に脆弱で復旧に時間がかかる。代替手段もないに等しい。結局はマンパワーに負うところが大きい。大勢の応援部隊に来ていただいても、如何に戦略的に采配できるか否かは「人」にかかっている。トップダウンではない、より実践的な支持が出せる必要がある。

（企画）なるほど、裏を返せば阪神・淡路では人材があって出来たことが年々人が入れ替わったり、経験者が退職したりという状況の中で、キーマンというかマンパワーの醸成が急務であるということですね。

（水道）そうです。いくら良くつくられたマニュアルがあっても、それを実地で活かす事の出来る「人」がいなければ何もなりませんし、最終的にはそういう立場に立つ「人」の判断力がものをいうと思います。

（水道）あと、引き継いでおきたい事柄としては事務処理系のマニュアルを作っておきたいと思います。災害時には技術系の職員が現場に貼り付けになるケースが多いかたわらで、いざ復旧・復興を行うとなると事務系の処理が増えていく、

タイミングを逃がさず補助申請にこぎつけていくという事が非常に大切なこととして明記されておく必要があると思います。

（水道）同様の観点から、今回整理できたのは応援市に対する支払方法などにあいまいな部分が多かったので、添付書類も五市協の雛型からあらためて起こしたし、ボランティアで現地に入ってくださっている職員の方にも、担当していただく業務に応じて補助が受けられる場合があったりと統一的な取り扱いに苦慮した部分もありました。そこら辺りは経験に基づく整理が出来たように考えているので、上手く引き継いでおきたい点であると考えています。

（企画）なるほど、震災を経験することでスキルを挙げることが出来たというお話はよいお話ですね。言われるようにキッチリとした引継ぎが大切だと思います。それ以外にも、水道事業に関しましては老朽施設の更新整備や、耐震性の向上などの課題があるようにお聞きをしておりますが、震災後の財政難の折、そこら辺りをどのような工夫で乗り切られようとされていますか。

（水道）施設整備については、整備計画をまとめて年次的に実施していくことになります。昭和１３年から引き続き使ってきている施設が多いため、配水管を中心に老朽化が進んでいます。出来れば、万が一の災害に見舞われても耐震性を向上させることにより破壊されにくい、あるいは一部が破壊されても二層化による給水機能の確保などを念頭におきながらの整備を進めていくことになります。

（水道）収入の増加が見込めない中で、管路を含む全方位的な更新整備には相当な困難を伴います。そこで重要になってくるのが、やはり危機管理マニュアルだと考えています。１０年前、水の復旧に要した時間が６週間、これを現在では３週間で出来ることを目標にしています。職員の迅速な対応をはじめとするソフト面を充実させていく事が重要だと考えています。同様の観点から、緊急貯水槽を市内の８箇所に設置することにより８００ｔの飲料水が供給できるようになっています。

（企画）施設の更新整備や、災害（事故）対策は全国的に共通した悩みというか、困難課題として横たわっているような気がします。

では、最後に、そのことを含めて今後の水道事業の展望と課題について、それぞれ一言ずついただいておわりにさせていただきたいと思います。

（水道）大きな課題としては、水道事業の情報公開をより一層進めることにより、市民の方に現状を良く知っていただくことが重要かと考えています。

（企画）そうですね、安全で安心して使うことが出来る「水」を生み出すためにどれほどのコストがかかっているのかということを、日常生活の中で考えたことはないかも知れません。そこら辺りの情報に関しても公開性を高める必要があるかも知れませんね。

（水道）そうです。さらに「価値」を高めるために取り組んでいる実態と、市民の皆さんが知っておられる事とは差が大きいと思います。その辺を今後はわかりあうことにより事業を展開していくことが出来ればもっと良くなる可能性はあります。

（水道）水道は安全で安心な水が蛇口をひねれば直ぐに出る。ということが当然であった訳ですが、そのことを当然にするためのコスト、「安全・安心」を生み出すための経費ということにあまり興味をもっていただく取り組みはなかった。

全国的な施設の老朽化や財政難により、今後は、それが必ずしも当然でありつづけるとは限らない時代になっているのではないかと思います。もし、従来どおりの「当然」を望まれるのであれば、それ相当の経費負担が生じてくるということを如何に理解してもらえるかが当面の課題だと思います。

（水道）最近は水道から出る水をそのまま飲む人がいますか？
　みんなペットボトルでしょう。そういった価値観の変化もあります。

（企画）私は、飲みます。リッターあたり単価がガソリンより高い「水」を飲む余裕はありませんし、この国の歪んだ豊かさを感じる一方で、やはり水道の水をお飲みになっている方々はおられると思います。私はこれからも公共水道さんに期待して、出来ればペットボトルとも競争していただきたい派なんですが。

（水道）確かに、安定供給と安全性において他に負ける気はいたしません。ペットボトルの水は凍らせた時に腐りやすいという弱点も持ってますし、やはり、安全でおいしい水は公共水道です。

（水道）いつでも、どこでも、安全でおいしい水をこれからも供給していくために頑張るという気持ちで一杯です。当然のことながら「安全性」は水道に限らず今後の公共サービスに課せられた第一の使命だと考えています。

（企画）ありがとうございました。準公益ともいえる電気事業やガス事業にもこのたび取材をさせていただきました。同じライフラインを預かる水道事業に関しては、その安全性という価値を高めるためにかけるコストにおいて天と地の開きを感じます。
　その中で、最大の効果を目指して頑張っておられる公営企業の皆さんには頭が下がります。是非、これからは「水」に関する価値観を市民の皆さんと共有できるよう頑張っていただいてさらなる発展を期待しています。本日はどうもありがとうございました。

平成 17 年 2 月 15 日

芦屋市長　山　中　　健　様

芦屋市
まち・人・くらし活性化推進懇話会
座　長　　安　田　丑　作

芦屋市まち・人・くらし活性化推進懇話会からの提言

本懇話会は、平成 16 年 5 月 18 日に設置され、市が行う総括・検証のプログラムを側面から支援するとともに、ともすれば分野別の取り組みに偏重しがちな市の考え方を、可能な限り横断的なものになるようアドバイスしてきました。まちやくらし、そして人の復興が果たしてどこまで成し遂げられたのか、そして、残された課題にどう立ち向かい、芦屋市のさらなる発展へと結び付けていくかことが出来るのか。四度の懇話会では、「ステップ１」としての 10 年の振り返り、「ステップ２」としては市の整理した復興資料の検証、次には市民アンケートや市民ワークショップの結果から得た今の芦屋に足りないところ、望むことを中心に検証する「ステップ３」を経て、本日「ステップ４」の報告書について最終的な討議を行いました。

本日、ここに懇話会を通じて得た意見をとりまとめましたので、今後の芦屋のまち・人・くらし活性化推進の一助とされますよう提言いたします。

ステップ１
～震災１０年の振り返り～

（１）10 年というときの流れは良い意味でも悪い意味でも震災を過去のものにしつつある。震災から 10 年を迎え、震災による表面的な影響は間違いなく低下している。人口は震災前の水準を超え、ライフラインはより耐震力を増し、まちなみは整備された。その一方で、人々の危機意識は震災直後よりも低下しており、整備された防災施設に人々の防災意識が注ぎ込まれていないこともまた浮き彫りになっている。

（２）長期化する不況や、見た目の復興が市民と震災との関わりを薄めていることも事実である。少子高齢化の急速な進展と被災自治体の財政難も加わり、市民の関心が全体として震災を超えたところで多岐多様化してきている。

（３）10 年を長いとみるか短いとみるかは人それぞれだが、急ぎすぎた復興と言えなくもない。少し立ち止まってこれからのことを考える「時」があっても良いと考える。そのための仕掛け創りに向けた組織を立ち上げて継続的な検証を行っていく必要がある。

（４）この 10 年の間に、行政の顔が市民から良く見えるようになった。その結果、各自治体の力量と基本的な施策の進め方が明らかにされたとも言える。今後、私たちは、そのことを前向きに捕らえ、今後の行政運営に積極的に関わっていくことが出来るかが問われている。

（５）10 年の時の流れは、震災を知らない市民や、子供たちを増やした。忘れたい面もあるが、このままでいいのだろうかとの不安が大きくなっている。きちんと課題を整理し、今後の市民生活の中に災害の教訓と防災意識を根付かせていく必要がある。

ステップ２
～統計上の復興と復興計画の総括・検証～

（１）統計上は震災前を越えた人口は、都市全体としての復興の証ではある。このことは新たな活力を生む一方で、新たな課題を各被災地域に持ち込んでいる。まちなみや景観形成においても同様、大きな人口移動は旧い文化と新しい文化の摩擦と衝突を呼び寄せる。活発な地域活動への参加意識を基盤とする既存のコミュニティと新たなコミュニティの融合が望まれる。

（２）目に見える形での復興はほぼその役割を終えつつあるが、市民生活あるいは都市機能の有機的な側面での回復は、まだまだこれからの感がある。市民の流動性も高かったこの 10 年を経て、今後はソフト面における防災文化の醸成が大切になる。

（３）復興計画と総合計画との使い分けはわかりにくいが、財政的にも時間的にも膨大な投資をこの間の復興に投入してきた。今後の芦屋市の方向性を含めた広範なまとめが必要だと思う。

（４）防災倉庫の設置や、飲料水兼用の貯水槽が配置された公園は地区防災拠点として整備された。しかしながら、その一方で公共建物の耐震化や特に一般住宅の耐震化率はどうか。生命を守るという基本的な課題は未だ積み残されている。

（５）道路整備が進められ、延焼遮断帯、物資輸送経路としての機能強化が図られた。震災時には避難経路や救援物資の輸送路が寸断されたことが初動期の活動を妨げたことへの対策である。しかし、それだけでは十分でなく人が経路を経路として認知すること、その道が生命をつなぐ命綱であることを意識する仕掛けが不可欠である。

（６）災害直後にあたらしい文化の息吹が感じられた。参加する文化である。支えあいに参加するボランティアは「元年」と呼ばれ、まちづくり協議会をはじめとした行政参加は「協働と参画」の胎動期を創造し、コミュニティ文化の発展を想起させた。新しく芽生えた文化をしっかり根付かせて、大きく育てるのが生かされた私たちの責任の一つである。

ステップ３

～市民アンケート、ワークショップ、懇談会～

（１）年を追うごとに希薄になる危機意識に危機感を感じると言う意見が多く寄せられた。防災倉庫が設置されたということは情報としては入ってくるが、どこにどういう形や役割で設置され、使い方が周知されるという生きた情報にはなっていない。

（２）天災は予期できないため、防災は日常生活に埋め込むかたちでしか機能しない。防犯と同心円状に置きなおして危険箇所をパトロールするなどの平時での取り組みが重要となってくる。

（３）地域の交流イベントへの参加者が固定化していること、自治会等地域の世話役が高齢化していることは、防災意識以前の参加意識の問題である。多世代家族が希少化している現代における世代間交流は困難な課題ではあるが、子育てや介護の経験を共通項とすることにより、異世代が連携して社会参加することは決して不可能ではない。

（４）学校が地域の中で十分に活かされていない。生徒を含め若い世代と一緒に取り組むことが出来る課題の整理が必要である。学校には校区があり、地域と密接につながってる。まずは、小さなブロック単位から始めることが重要ではないか。

（５）各市民団体は組織として自立していることが最大の強みである。団体内のコミュニケーションは完成されており、団体としての機能はもちろん個人としてのスキルも非常に高い。今後は、行政と市民団体が有機的に結合することが重要である。

（６）アンケートの内容は総花的にならざるを得ないが、市にはそれぞれの部署が役割を分担して市民との接点をつくってきている筈なので、各項目がそれぞれの所管において大切に受け止められることを期待する。また、各項目をさらに掘り下げることで新たな市民意識調査が実施できたり、このたび寄せられた「自由意見欄」に素晴らしいものがたくさん含まれている。今後の対応一つでこのたびのアンケートの値打ちが変化する。

（７）ワークショップは非常に意見の出やすい手法なので、広範な、そして場合によってはショップからさらに新たなショップが派生的に生じるぐらいに討論が深まる時もある。しかし、大切なのはそういった貴重な意見を的確に長期・中長期・短期に分類し対応をとる行政の姿勢である。協働と参画の精神をここで根付かせるチャンスと捉えていただきたい。

ステップ４

～報告書、そして提言～

（１）安全で活気にあふれた「まち」

・震災復興計画に基づき整備されたまちを基盤にしつつ、復興 10 年を節目に今後はそこで増進された安全・安心の施設整備が市民生活に根ざしたものになるようソフト面の強化を図る。

・10年の復興過程から得た教訓の一つである「協働のまちづくり」をさらに地域に定着させるため、課題を認識する段階から地域が一体になって検討する取り組みや、地域で整備された施設を地域で活用、管理していく仕組みを創出していく。
・自然災害は必ずやってくるとの意識を軸に、生命を守るための耐震化のまちづくりについては今後も前向きに取り組んでいく。「防災文化」は地域と行政の協働の中からしか生み出せないことを認識する。
・地域への愛着を深め、まちの活気や活力を創出するため、身近な自然などに意を払い自然との共生とまちづくりを融合させていく。「芦屋庭園都市宣言」の主旨に沿って、一世帯一緑化運動などを早期に立ち上げる。
・残された密集市街地や細街路の整備については、現存する環境資源や景観保全とのより良い接点を見出しながら、地域特性やまちなみ文化を守りながらの更新を目指すなかから地域の特性を活かしたまちづくりを推進する。
・地域のまちづくり協議体は、全体を取りまとめることが困難な場合には、より小さなブロックである街区のデザインから始めてみる試みがあっても良い。
・日常的な安全確保としての防犯や交通安全については地域主体の取り組みに期待するとともに、公共交通（バス）路線の整備とともに車両に対する規制や、歩車道区分や案内標識等の安全誘導施策を推進する。
・商店街等、商業ゾーンを中心とするにぎわい創出に関しては、企業誘致や商店再生に向けたゾーニング及び、プロジェクトの立ち上げが急務である。
・ 事故・事件・被害などの防犯活動に関しては事前対応が大切であることから、市民と行政が協働のもと防犯パトロール等の抑止効果を発揮する取り組みを強化推進する。

（2）安心でやさしさにつつまれた「くらし」

・震災が人々に教えた支えあうことの大切さをくらしに生かすための福祉ネット（見守りや生活援助員等の災害文化の一つ）を地域に根付かせ、地域のネットワークのなかで拡大育成する取り組みを推進する。
・市民の健康づくりについては、情報や機会の提供方法に工夫が必要である。日常生活に欠かせない健康づくりや、健康であることを心から喜び合えるという視点で取り組むことが必要である。
・誰もが安心して暮らしやすいまちのデザインをめざしたユニバーサルなまちづくりをハードとソフトが融合するよう進めていく。
・安全・安心のくらしを実現するための住宅の耐火・耐震化については、まち全体、くらし全体の安全性を高める取り組みとして進める。助成制度により、応益負担の仕掛けも創出する。

・まちの活力やくらしの活気を生み出すために、市・地域への愛着を深め、歴史・文化・自然等への理解の上に立った、地域の固有資源を生かしたくらしの創造を図ることにより活性化の推進に努める。

・ 環境保全に対する意識を高め、共有することにより、環境負荷軽減を促進するための循環型環境システムの創出を図る。また、循環型社会を創造するための協働と参画を促進する。

（3）「人」が結び、支えあうシステムの再構築

・復興過程で得た、高齢者や地域の「見守り」を全国に先駆けた高齢化対策の先行事例として捉え、十分な検証を行ないながらよりいっそうの安全性と地域性を高める取り組みを進める必要がある。このたびの高齢者への見守りが児童への見守りへと発展し、防犯パトロールなどに発展的に実践されていることは好例である。

・災害弱者と呼ばれた障害者等への災害発生時における緊急対応もさることながら、同時に、障害者の社会進出いわゆる就労支援等の施策を展開することにより健常者との一体感を日頃から高めることが重要である。

・世代間交流とともに、学校と地域との連携強化に努め、芦屋の未来を担う子供たちが寄りゆたかな自然と歴史・文化のなかで育まれることを期待する。

・震災時、そして復興過程において醸し出された外国人との交流をはじめとした国際交流の兆しを、「防災」を世界のいわば共通語として今後の取り組みに生かしていく。

・復興過程で得た、ボランタリー精神の大切さ、ＮＰＯが果たした役割の大きさを適正に評価し、今後の発展に向けた支援を創造・継続し、新たな協働と参画の仕掛けへと発展させる。

・震災以降に飛躍的に発展したコミュニティビジネス（地域事業）の根付きをめざし、より新しい発想によるビジネスが市民との協働や、行政との連携により分野を横断して発展することを目指す。

・今後、大量に定年を向かえる団塊の世代の経験やパワーを地域の活力に転換することが出来るような受け皿づくりが必要であるとともに、団塊の世代は残る現役の数年間を地域交流に目を向け、地域の中での自分というものを一度点検しておく必要がある。

おわりに

天災は忘れた頃にやってくるということだが、それだけに行政の責務は大きい。人々の日常的な行動のプライオリティの中で防災はともすれば低位に位置付けられることになる。その場合に十分な備えの上にたって、安全誘導が出来ることが今後の自治体の経営規範となる必要がある。

大規模災害時に備えた復興基本法の制定等、さらなる法規的な整備も必要であろう。耐火・耐震化の促進に向けた補助制度整備も必要であろう。しかし、何よりも必要なことは阪神・淡路大震災から学んだ数多くのことを私たちが実践しなければならないということである。

大震災とその後の復旧･復興の過程で私たちが得た最大の教訓とは、マン・ツー・マン、フェイス・ツー・フェイスの人のつながりの大切さではないだろうか。その上にたってはじめて、「自助」・「共助」・「公助」の概念を市民生活の中に真に根付かせることが可能となろう。

これからの芦屋における新しいまちづくりへの挑戦を期待して懇話会を閉じさせていただきます。

芦屋市まち・人・くらし活性化推進懇話会設置要綱

（設置）

第１条　震災復興１０年の歩みと、多くの人とのかかわりから得た貴重な教訓を踏まえ、本市のまち・人・くらしの一層の活性化について幅広く意見を求めるため、芦屋市まち・人・くらし活性化推進懇話会（以下「懇話会」という。）を設置する。

（所掌事務）

第２条　懇話会は、専門的、総合的な見地から本市の復興状況を検証及び総括し、今後のまち・人・くらし活性化推進の方向性について必要な事項を審議し、芦屋市復興１０年総括本部に意見を述べるものとする。　（構成）

第３条　懇話会は、市民団体代表、市民ボランティア、学識経験者等のなかから、市長が委嘱する１５名以内の委員をもって構成する。

（任期）

第４条　委員の任期は、平成１７年３月３１日までとする。

（運営）

第５条　懇話会には、座長及び座長代理を置く。

１　座長は委員の互選により定める。

２　座長代理は、座長の指名により定める。

３　座長は、懇話会の進行をつかさどり、懇話会を代表する。

４　座長代理は、座長を補佐し、座長に事故あるとき、又は座長が欠けたときは、その職務を代理する。

５　懇話会は、必要に応じて座長が招集する。

６　懇話会は、審議のために必要があるときは、関係者の出席を求めて意見を聴取するほか、資料の提出を求めることができる。

（報酬）

第６条　委員が懇話会に出席したときは、別に定めるところにより、報酬を支給する。

（庶務）

第７条　懇話会の庶務は、復興１０年事業に関する事務を所管する課において処理する。

（補則）

第８条　この要綱に定めるもののほか、懇話会に関し必要な事項は、座長が定める。

附　則

（施行期日等）

１　この要綱は、平成１６年５月１８日から施行する。

２　第５条第６項の規定にかかわらず、最初の懇話会は市長が招集する。

芦屋市まち・人・くらし活性化推進懇話会・名簿

（敬称略・50 音順）

◎　座長・○　副座長

選出区分	氏　　名	職　　業（ 役 職 ）等
学識経験者	○　石 原　　俊 彦	関西学院大学産業研究所教授
	小 浦　　久 子	大阪大学大学院工学研究科助教授
	中 田　　智 恵 海	武庫川女子大学教育学科助教授
	林　　ま ゆ み	兵庫県立大学自然・環境科学研究所助教授
	森 津　　秀 夫	流通科学大学情報学部経営情報学科教授
	◎　安 田　　丑 作	神戸大学工学部建設学科教授
	山 内　　修 身	前・芦屋市助役
市民代表	大 橋　　一 生	元・芦屋市総合計画審議会委員
	小 田　　修 造	芦屋市商工会会長
	加 藤　　純 子	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｸﾞﾙｰﾌﾟ「芦屋おたすけたい」代表
	小　林　　功	芦屋青年会議所理事長
	芝　　勇 太 郎	芦屋市社会福祉協議会
	富 田　　泰 子	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｸﾞﾙｰﾌﾟ「とまと」代表
	廣 瀬　　忠 子	芦屋市婦人会会長
	藤　田　　一	芦屋市自治会連合会代表

震災復興１０年芦屋市まち・人・くらし
総　括・検　証　報　告　書
発効日　平成１７年３月
発　行　芦屋市総務部企画課
〒659-8501 芦屋市精道町７番６号
TEL（0797）38-2009　FAX（0797）31-4841